

つか ばたけ い せき
塚 畠 遺 跡 II
－ F 地点の調査－

2008

本庄市遺跡調査会

序

太平洋戦争中、陸軍の飛行場として利用されていた本遺跡周辺は、戦後開拓されて広大な畑地となり、都市近郊の利便を生かした野菜やスイカなどの栽培が大規模に行われていました。また、冬には「上州の空っ風」の影響により凄まじい砂塵がおこり、防風林と黄色い砂嵐が遠くからもよく見えていたことが思い起こされます。その後昭和50年代の終わり頃になって、県北地域の開発拠点として総面積110万㎡の児玉工業団地が建設され、ここ20～30年の間に平坦な畑地を主体としたのどかな田園風景から、アスファルト道路で縦横に区画された中に大小様々な工場や住宅が多数立ち並び、車が激しく行き来する忙しい都市的景観に急速に変化してきました。

それとともに、これまで長い年月の間地中に保存されていた我々の先人達の歴史や文化の痕跡である埋蔵文化財も、これらの急激で大規模な開発によって破壊を余儀なくされ、それらを記録保存し将来に伝えていくための発掘調査も数多く実施され、多くの貴重な成果をあげています。

本書は、平成16年に倉庫建設に伴う事前の記録保存を目的として実施した本庄市児玉町共栄に所在する塚畠遺跡(F地点)の発掘調査の成果を記録したものです。発掘調査は、遺跡が最小限破壊される部分の比較的小規模なものですが、調査区内からは古墳時代後期の竪穴式住居跡をはじめとする多くの遺構が検出され、その中からは当時の人々が日常の生活で使用していた多くの土器が出土しました。

本書が、学術研究の基礎資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護や遺跡を理解するための一助として、多くの方々に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りました株式会社関東エンジニアリングをはじめ、ご教示・ご協力いただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

平成20年 5月 14日

本庄市遺跡調査会
会長 茂木 孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町共栄字南共和318-1に所在する、塚畠遺跡F地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社関東エンジニアリングの倉庫建設に伴う事前の記録保存を目的として、平成16年4月16日から5月28日の期間に実施した。
3. 発掘調査は、業務委託を受けた旧児玉町遺跡調査会が実施し、その調査担当には尾内俊彦と松澤浩一があたった。
4. 発掘調査から本書刊行に至る経費は、すべて株式会社関東エンジニアリングが負担した。
5. 本書の執筆及び編集は、恋河内昭彦が行った。
6. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の五万分の一(平成2年)・二万五千分の一(平成5年)と、参謀本部陸軍部測量局作成の二万分の一迅速測図(明治18年)である。
7. 第4図と第5図のXY座標値及び抄録中の北緯・東経の数値は、世界測地系による。
8. 本報告書を作成するにあたり、遺構番号をA地点からの通し番号と整合させたため、以下のとおり住居番号を一部変更した。

(旧)第80号住居跡 → (新)第76号住居跡
(旧)第81号住居跡 → (新)第77号住居跡
9. 本書中の遺物観察表に帰した記号は、以下のとおりである。

A-法量、B-成形、C-整形・調整、D-胎土、E-色調、F-残存度、G-出土位置、
H-備考
10. 発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や期間からご教示・ご協力を賜った。記して感謝します。

赤熊 浩一、大谷 徹、金子 彰男、駒宮 史朗、坂本 和俊、篠崎 潔、外尾 常人、
田中 広明、田村 誠、富田 和夫、鳥羽 政之、中沢 良一、長滝 歳康、丸山 修、
宮本 直樹、矢内 勲

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

塚畠遺跡F地点発掘調査組織

旧児玉町遺跡調査会（平成16年度）

会 長	雉岡 茂	児玉町教育委員会教育長
理 事	清水 守雄	児玉町文化財保護審議委員
	桜井 豊	児玉町文化財保護審議委員
	富丘 文雄	児玉町文化財保護審議委員
	荒井 一夫	〃
	立花 勲	児玉町総務課長
	岩上 高男	〃 農林商工課長
	鈴木幸比古	〃 土木課長
	福島 秀雄	〃 都市計画課長
	清水 満	児玉町教育委員会社会教育課長
監 事	間正 明彦	児玉町文化財保護審議委員
	出牛 博	児玉町総合政策課長
幹 事	福島 一順	児玉町教育委員会社会教育課長補佐
	鈴木 徳雄	〃 文化財係長
	恋河内昭彦	〃 文化財係主任
	徳山 寿樹	〃 文化財係主事
	大熊 季広	〃 文化財係主事
	松澤 浩一	〃 文化財係主事（調査担当）
調査員	尾内 俊彦	児玉町遺跡調査会職員（調査担当）

塚畠遺跡F地点整理・報告書刊行組織

本庄市遺跡調査会（平成20年度）

会 長	茂木 孝彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清水 守雄	本庄市文化財保護審議委員
	佐々木幹雄	〃
	丸山 茂	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八木 茂	本庄市監査委員担当副参事
	小谷野 博	〃 参事兼会計課長
幹 事	儘田 英夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木 徳雄	〃 課長補佐兼文化財保護係長
	太田 博之	〃 埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃 埋蔵文化財係主査
	大熊 季広	〃 埋蔵文化財係主任
	松澤 浩一	〃 埋蔵文化財係主任
	松本 完	〃 埋蔵文化財係主事
	的野 善行	〃 臨時職員
調査員	尾内 俊彦	本庄市遺跡調査会 職員

目 次

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第Ⅲ章 遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第1節 竪穴式住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第2節 土 壙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

第3節 溝 跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

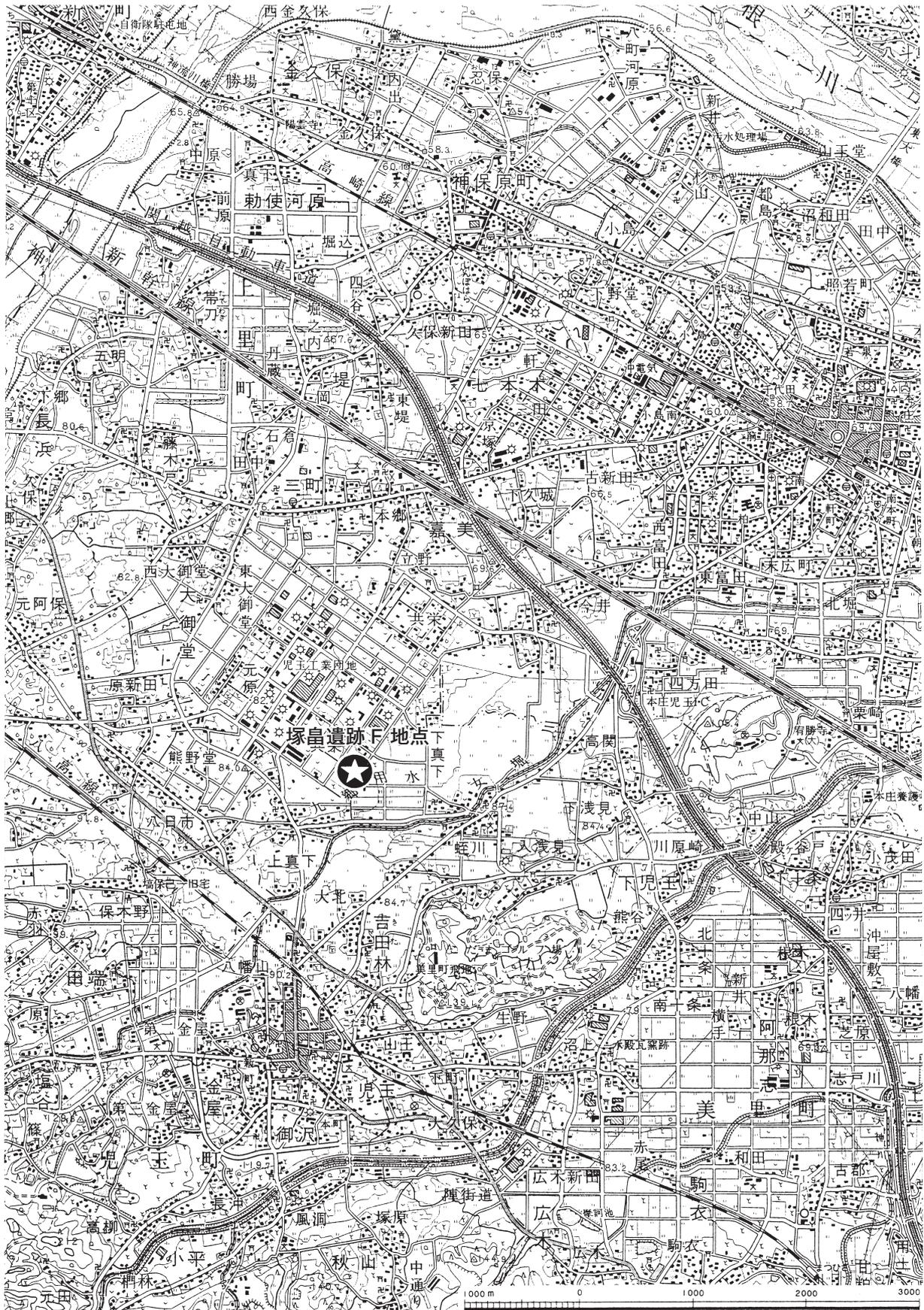
第4節 その他の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

第Ⅴ章 児玉地方の土製支脚について

— 第79号住居跡出土の土製専用支脚とその周辺 — ・・・・ 23

<参考文献>・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

写 真 図 版



第1図 遺跡の位置 (1)

第 I 章 発掘調査に至る経緯

平成15年6月10日、埼玉県児玉郡児玉町大字共栄(現本庄市児玉町共栄)字南共和318-1に倉庫の建設を予定している株式会社関東エンジニアリング代表取締役湯山慶次より、開発予定地内にかかる埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に照会があった。

照会のあった開発予定地は、『遺跡分布地図』に記載される周知の埋蔵文化財包蔵地である塚畠遺跡(No54-028)の範囲内に位置していることから、「埋蔵文化財の包蔵に注意を要する区域に相当することから、現状変更しようとする場合は、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための試掘調査を実施し、その埋蔵深度や性格等を把握する必要がある」ことを、平成15年6月27日付け児教社第68号により回答した。その後、8月19日に同社より「試掘調査依頼書」が提出され、9月16日に現地の試掘調査を児玉町教育委員会が実施したところ、開発予定地の北西側半分から竪穴式住居跡や土壇等の遺構が多く検出された。そのため、この試掘調査の結果に基づいて、「現状変更を実施する場合は、事前に町教育委員会と施工方法、施工時期等について連絡調整し、文化財保護法の規定に則って事業を実施することが必要である」ことを、平成15年9月29日付け児教社第106号により回答した。そして、建物の配置や施工方法について協議したところ、設計上掘削により埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる倉庫建物の基礎部分と雨水浸透槽や浄化槽埋設部分については、事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを説明した。

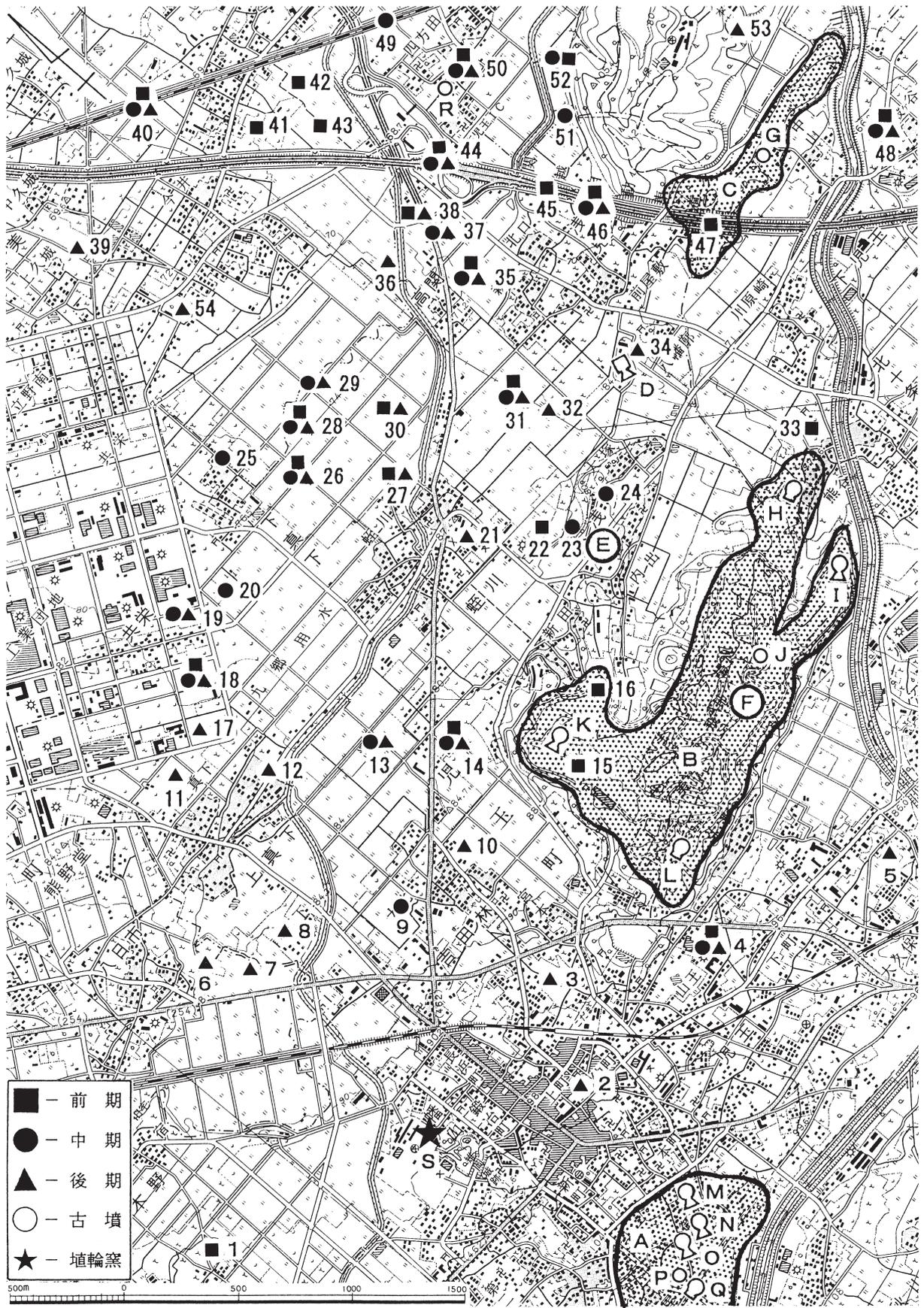
以上の協議を踏まえて、児玉町教育委員会の指導のもと、平成16年4月14日に株式会社関東エンジニアリング代表取締役湯山慶次と児玉町遺跡調査会会長雉岡茂の間で、埋蔵文化財保存事業の委託契約が締結され、開発予定地内における記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして、発掘調査地点を塚畠遺跡F地点と命名した。

発掘を実施するにあたっては、平成16年4月12日に株式会社関東エンジニアリング代表取締役湯山慶次より、文化財保護法第57条の2第1項、同99条第1項及び文化財保護法施行令第5条の規定による「埋蔵文化財発掘の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付で埼玉県教育委員会に進達した。これに対して埼玉県教育委員会からは、平成16年4月23日付け教文第3-18号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」が、関東エンジニアリング代表取締役湯山慶次に通知され、土木工事等の着工前における発掘調査の実施が指示された。

発掘調査を実施するにあたっては、平成16年4月12日に児玉町遺跡調査会会長雉岡茂より、文化財保護法第57条第1項、同99条第1項及び文化財保護法施行令第5条第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付で埼玉県教育委員会に進達した。これに対して埼玉県教育委員会からは、平成16年4月23日付け教文2-8号による「埋蔵文化財発掘調査について」が児玉町遺跡調査会会長雉岡茂に通知され、発掘調査は文化財保護法の趣旨を尊重し、慎重に実施するように指示された。

なお、塚畠遺跡F地点の発掘調査は、平成16年4月16日から同年5月28日の約1ヵ月半の期間を要して実施された。

(本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係)



第2図 女堀川中流域の古墳時代遺跡

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は、JR高崎線の本庄駅から南西側に約5km、関越自動車道の本庄児玉インターから南西側に約2.5km、JR八高線の児玉駅から北に約2kmの埼玉県本庄市児玉町共栄地内にある。本遺跡の周辺は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の扇央部東端付近にあたり、上武山地の北側に延びる児玉丘陵下の低平で広大な本庄台地の東側縁辺部に立地している。本遺跡の東側には、女堀川に沿って帯状に低地が開けており、当地域ではこの女堀川低地を中心にして多くの遺跡が所在している。

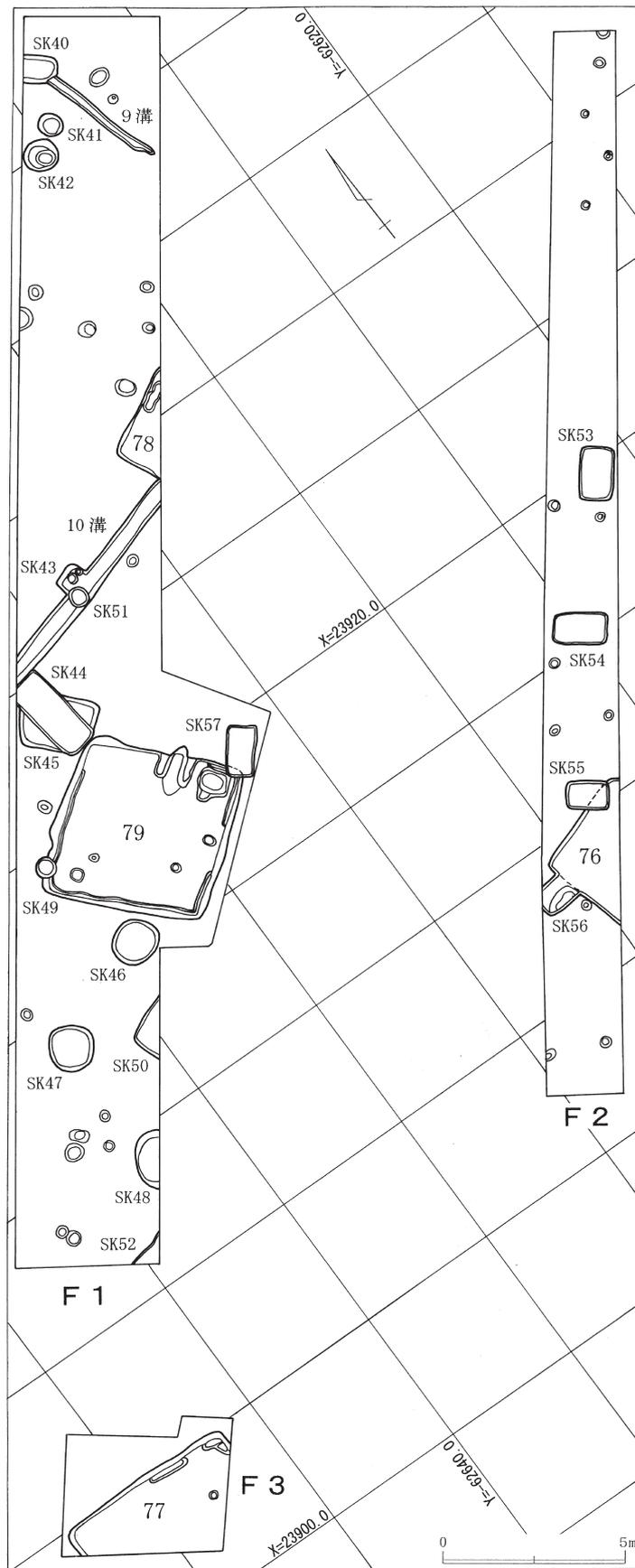
本遺跡周辺の女堀川中流域では、概して弥生時代までの遺跡は少なく、古墳時代前期以降になって遺跡数が急激に増加する特徴が見られる。低地内に集落が積極的に進出しはじめる古墳時代前期の遺跡は、低地内の大規模集落である後張遺跡を中心にして、その周辺に小規模な集落が多く展開する様相が窺え、本庄台地東側縁辺部のやや奥に位置する諏訪遺跡や、残丘上の生野山遺跡と塚本山遺跡などでは方形周溝墓(群)による墓域が形成され、当地域の前期の首長墓である全長約60mの前方後方墳の鷲山古墳も、低地内の集落からよく見える生野山と大久保山の間に位置する小規模な残丘上に築造されている。

中期の遺跡は、前期から継続する集落も多いが、本庄台地や残丘下の低台地上にさらに集落が拡散する傾向が窺える。該期は、前期からの低地開発を基盤にして、さらに開発規模を拡大させていると考えられ、低地内の高縄田遺跡や蛭川坊田遺跡などで、低地内の微高地上を横断するようなやや規模の大きな葉研堀状の直線的な水路が検出されている。そして該期の生産性の向上と地域社会の繁栄を示すように、生野山残丘上には首長墓級の古墳として全長60mの類似した円墳の金鑽神社古墳と生野山將軍塚古墳が築造されている。

後期の遺跡は、集落がさらに中流域のほぼ全域に拡散し、本庄台地上や丘陵部内の開発が一層進行する。後期の首長墓は、生野山残丘上に全長60m級の生野山銚子塚古墳や生野山16号墳が築造されているが、これらは中期首長墓の円墳に変わって前方後円墳の墳形を採用している。そして、後期を通じて同じ残丘上には数百を数える小円墳が作られ、生野山古墳群や塚本山古墳群などの大規模群集墳が形成される。

7世紀中頃になると、当地域の低地内に立地する集落の大半は廃絶され、女堀川の低地を取り囲むように、西側の本庄台地縁辺部や東側の残丘斜面下の低台地上に集落が移動する現象が見られ、集落の大規模な地域的再編成が行われる。

1. 十二天遺跡
2. 仲町遺跡
3. 女池遺跡
4. 児玉清水遺跡
5. 大久保遺跡
6. 八荒神遺跡
7. 反り町遺跡
8. 金佐奈遺跡
9. 高縄田遺跡
10. 宮田遺跡
11. 辻ノ内遺跡
12. 上真下東遺跡
13. 辻堂遺跡
14. 南街道遺跡
15. 生野山遺跡(墓)
16. 生野山遺跡(集落)
17. 新宮遺跡
18. 塚島遺跡
19. 古井戸南遺跡
20. 平塚遺跡
21. 共和小学校校庭遺跡
22. 日延遺跡
23. 城の内遺跡
24. 新屋敷遺跡
25. 将監塚東遺跡
26. 堀向遺跡
27. 左口遺跡
28. 藤塚遺跡
29. 前田甲遺跡
30. 柿島遺跡
31. 浅見境北遺跡
32. 浅見境遺跡
33. 宮ヶ谷戸遺跡
34. 鷲山南遺跡
35. 東牧西分遺跡
36. 今井川越田遺跡
37. 梅沢遺跡
38. 川越田遺跡
39. 往来北遺跡
40. 諏訪遺跡
41. 塔頭遺跡
42. 地神遺跡
43. 今井条里遺跡
44. 後張遺跡
45. 飯玉東遺跡
46. 雷電下遺跡
47. 塚本山遺跡
48. 村後遺跡
49. 九反田遺跡
50. 四方田遺跡
51. 根田遺跡
52. 山根遺跡
53. 大久保山遺跡
54. 今井原屋敷遺跡
- A. 長沖古墳群
- B. 生野山古墳群
- C. 塚本山古墳群
- D. 鷲山古墳
- E. 金鑽神社古墳
- F. 生野山將軍塚古墳
- G. W45号墳
- H. 熊谷後1号墳
- I. 生野山16号墳
- J. 生野山9号墳
- K. 生野山銚子塚古墳
- L. 物見塚古墳
- M. 長沖31号古墳
- N. 長沖32号墳
- O. 長沖25号墳
- P. 長沖14号墳
- Q. 長沖8号墳
- R. 四方田古墳
- S. 八幡山墳輪窯跡



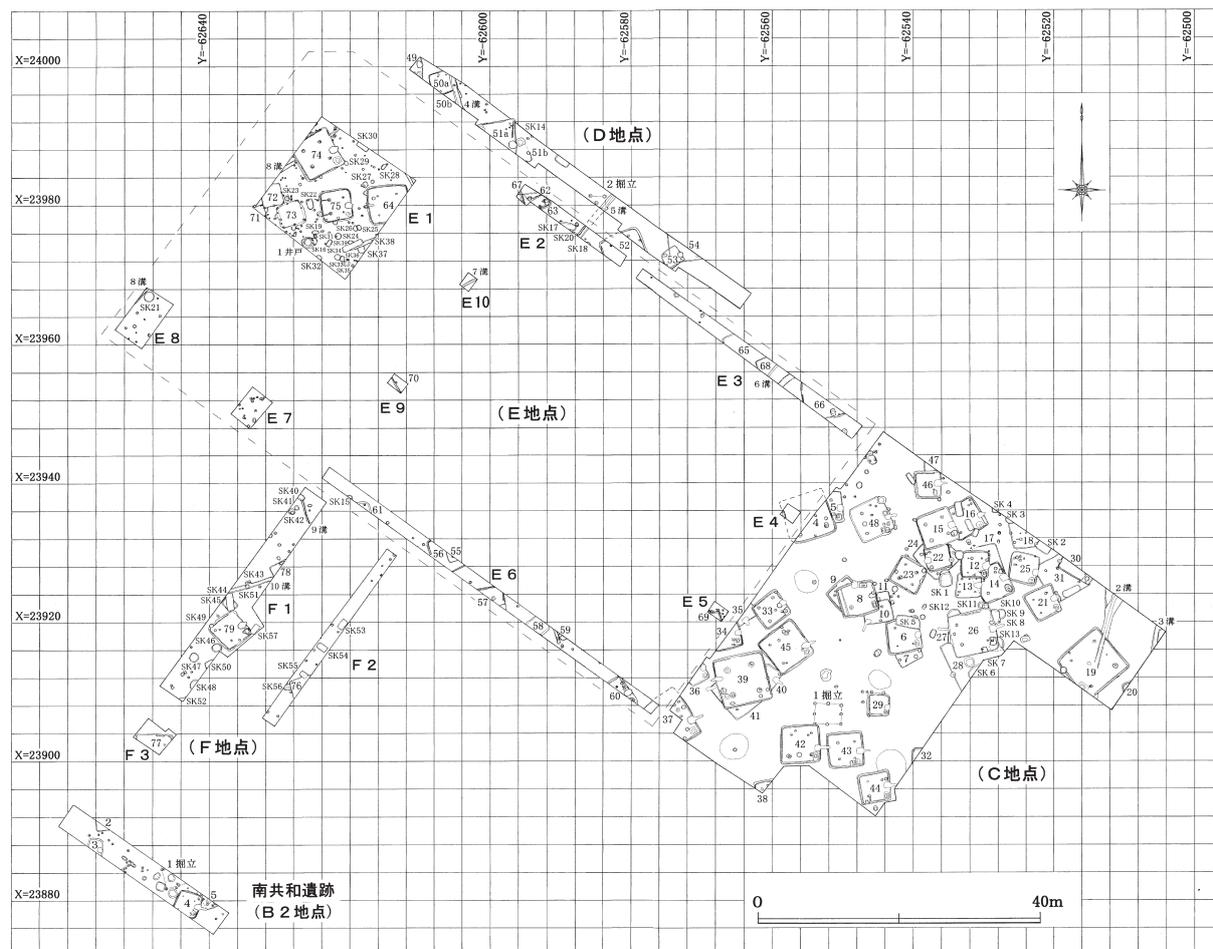
第3図 塚畠遺跡F地点全体図

第三章 遺跡の概要

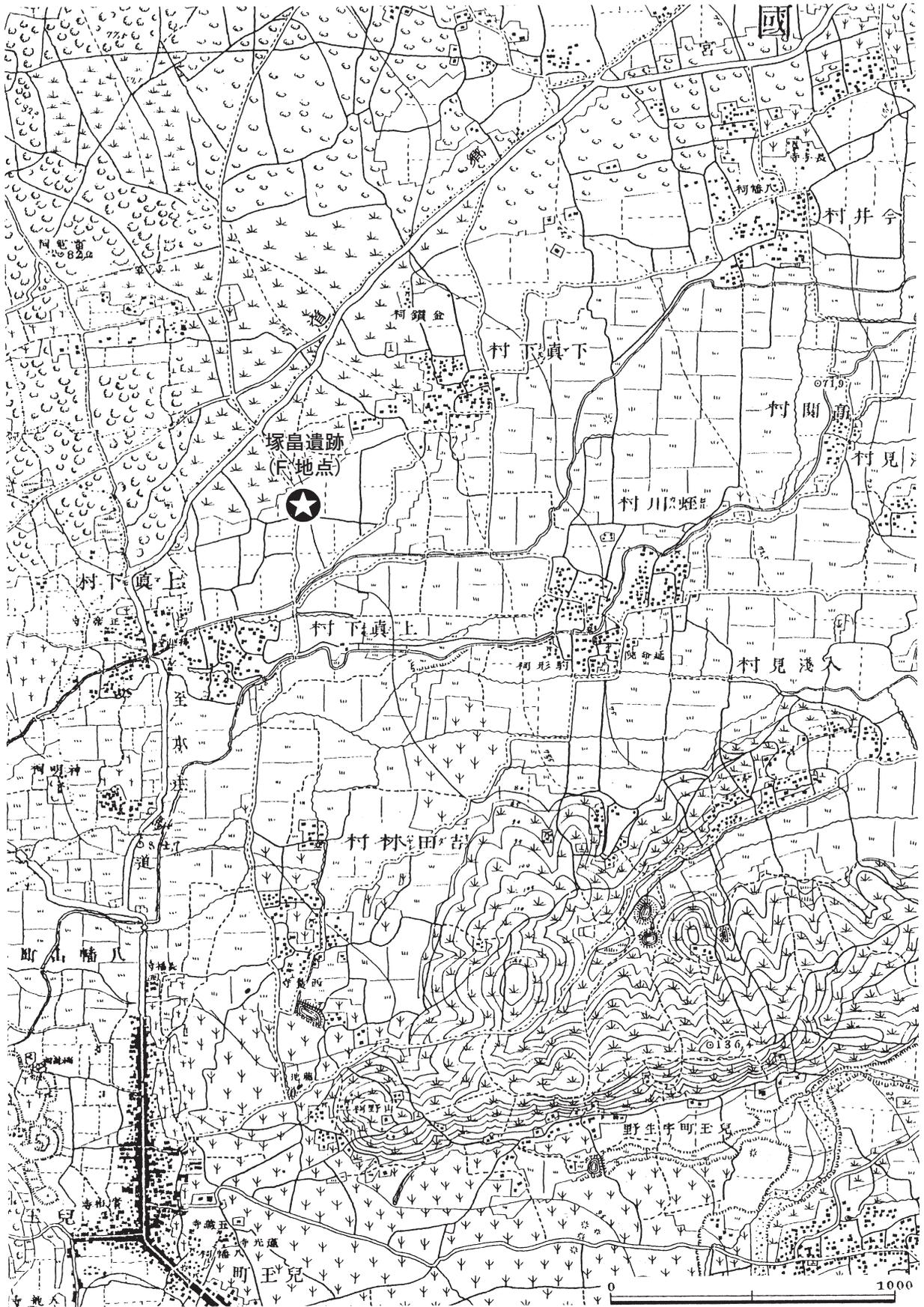
本遺跡は、女堀川中流域左岸の標高80mを測る本庄台地の東側縁辺部に立地する、古墳時代中・後期を主体とする集落遺跡である。本遺跡の南西側約200mには同じく古墳時代後期集落の新宮遺跡(恋河内1995)や辻ノ内遺跡(鈴木他1991)が近接して所在しており、これらの遺跡は遺構の分布が連続する同一遺跡である可能性も考えられる。

本遺跡は、すでに昭和62年に県営ほ場整備事業児玉北部地区の小排水路建設に伴ってA地点が、同じく町道改良(外周道路)拡幅舗装工事に伴ってB地点が、平成元年に民間の工場と事務所建設に伴ってC地点が、平成2年に町道改良舗装工事に伴ってD地点が、平成15年に民間の倉庫・事務所建設に伴ってE地点が調査されている。今回のF地点の調査は、本遺跡の第6次調査にあたる。

F地点の調査で検出された遺構は、竪穴式住居跡4軒・土壇18基・溝跡2条である。竪穴式住居跡は、古墳時代後期2軒と不明2軒である。形態等がある程度分かる第77号住居跡と第79号住居跡は、規模が5m程度で住居の向きを北東～東に向けた、本遺跡では最も一般的な住居跡である。土壇や溝跡は、遺構に伴う遺物がほとんど無いため明確ではないが、第56号土壇がその重複関係から縄文時代の可能性が考えられる他は、おそらくその大半が中近世以降の所産と思われる。



第4図 塚畠遺跡C～F地点



第5図 遺跡の位置 (2)

—明治18年頃

第IV章 検出された遺構と遺物

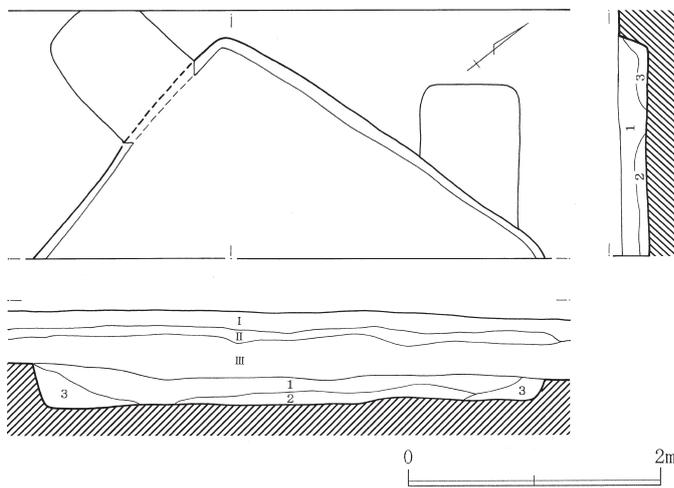
第1節 竪穴式住居跡

第76号住居跡(第6図、図版3)

F2区の南西側に位置し、重複する第55号土壌に切られ第56号土壌を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の北西側半分だけであるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向が2.24mまで、東西方向が3.10mまで測れる。北側壁は、 $N-74^{\circ}-E$ を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で36cmある。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床は、比較的平坦で堅く締まっている。調査区内で検出された部分では、柱穴やカマド等の住居内施設はまったく見られなかった。

出土遺物はなく、本住居跡の時期は不明である。



第6図 第76号住居跡

第76号住居跡土層説明

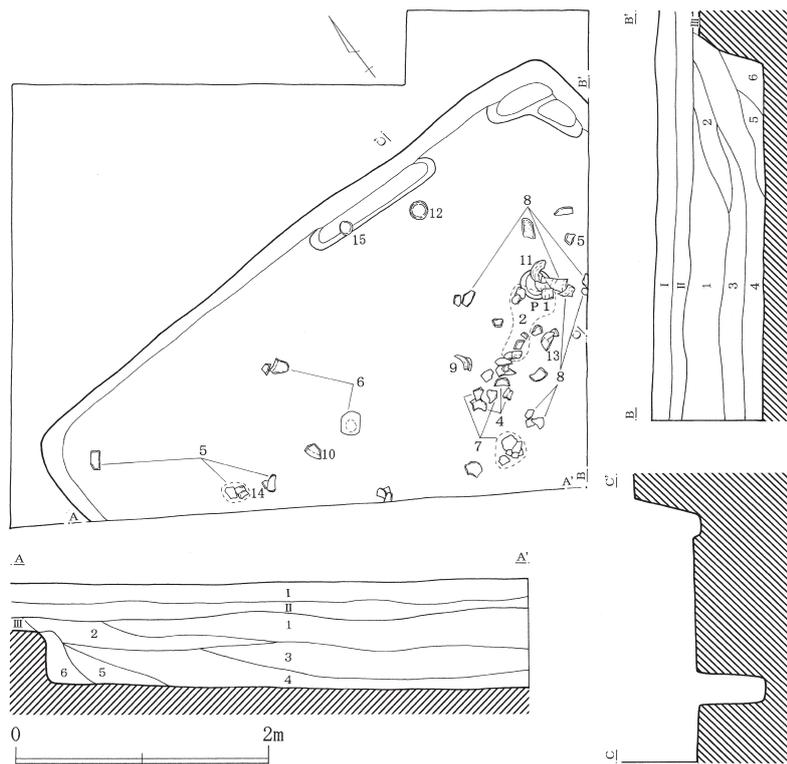
- 第I層：暗褐色土層（As-Aを多く、マンガン粒子、小石を含む。しまり強く、粘性弱い。現耕作土。）
- 第II層：灰褐色土層（As-Aを主体に、マンガンを均一、小石をまばらに含む。しまり強く、粘性弱い。床層。）
- 第III層：暗褐色土層（ローム粒子をまばらに、径5mmのローム小ブロックを均一、白色粒子を少量、マンガンを微量含む。しまりやや弱く、粘性強い。旧耕作土。）
- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一、炭化物粒子、径3mmの白色小ブロック、焼土小ブロックをまばらに含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第2層：茶褐色土層（白色粒子を均一、径3mmのローム小ブロックをまばらに、炭化物粒子を含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第3層：暗褐色土層（白色粒子をまばらに、ローム粒子を多く、炭化物粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第77号住居跡(第7図、図版3)

F1区南西側のF3区に位置する。調査区内で検出されたのは、住居跡の北側部分だけであるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向5.15m、南北方向は3.06mまで測れる。北側壁は、 $N-90^{\circ}-E$ を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で47cmある。壁溝は、幅18cm・床面からの深さ7cm程度で、北側壁の東側の一部に見られる。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に平坦である。ピットは、P1の1箇所が検出されている。P1は、その位置から4本主柱を構成する主柱穴の一部と考えられるもので、直径25cm前後の円形を呈し、床面からの深さは54cmある。カマドは、調査区内で検出された部分には見られない。

出土遺物は、住居跡の床面付近や覆土中から、土師器の破片が多く出土している。本住居跡の時期は、出土遺物から見て古墳時代後期と考えられる。



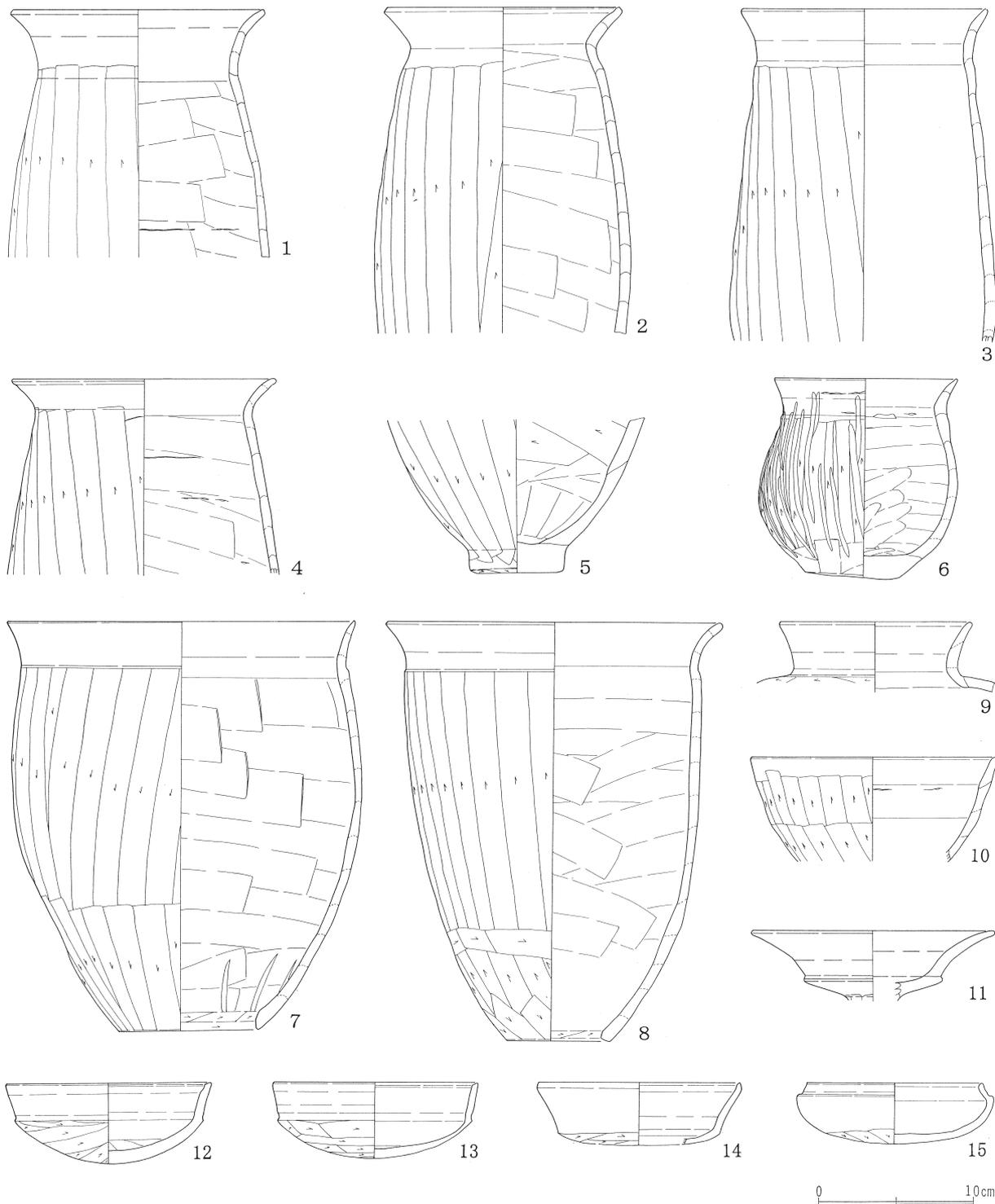
第7図 第77号住居跡

第77号住居跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（白色粒子を非常に多く、ローム粒子、径3mmのローム小ブロックをまばらに、マンガン粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第2層：暗褐色土層（白色粒子を多く、ローム粒子、マンガン粒子をまばらに、小石を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一、炭化物粒子、径1cmの焼土ブロックを少量、砂礫、土器片を含む。しまり、粘性あり。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径1cmのローム小ブロックをまばらに、土器片、砂礫を含む。しまり、粘性とも強い。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多く、径1cmのロームブロック、径5mmのローム小ブロックを均一に、炭化物粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多く、径1cmのロームブロック、径3mmのローム小ブロックを少量、炭化物粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第77号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (16.4)、残存高 16.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/3。H. 調査区壁床面付近。
2	甕	A. 口縁部径 15.4、残存高 21.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 2/3。H. 床面付近。
3	甕	A. 口縁部径 16.0、残存高 21.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 2/3。H. 調査区壁床面付近。
4	甕	A. 口縁部径 17.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-暗橙褐色。F. 口縁部 1/4。H. 床面付近。
5	甕	A. 底部径 (6.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ナデの後ケズリ、内面篋ナデの後ケズリ。底部外面ナデの後外周ケズリ。D. 白色粒。E. 外-暗褐色、内-明茶褐色。F. 1/2。G. 外面煤附着。H. 床面付近。
6	小形甕	A. 口縁部径 (11.8)、器高 13.1、底部径 6.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なミガキ、内面指ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 外面に黒斑あり。H. 床面付近。
7	大形甕	A. 口縁部径 22.4、器高 26.7、底部径 9.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部穿孔部内側ケズリ。D. 白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 2/3。H. 床面付近。
8	大形甕	A. 口縁部径 21.8、器高 27.3、底部径 6.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後上半篋ナデ。底部穿孔部内側ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-黒褐色。F. 3/4。H. 床面付近。
9	短頸壺	A. 口縁部径 (12.4)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 口縁部 1/3。H. 床面直上。
10	鉢	A. 口縁部径 (15.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外-暗褐色、内-暗茶褐色。F. 口縁部 1/3 強。H. 床面付近。
11	高坏	A. 口縁部径 (15.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗橙褐色。F. 口縁部 1/2。H. 覆土中。
12	坏	A. 口縁部径 13.2、器高 5.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. ほぼ完形。G. 体部外面に黒斑あり。H. 床面付近。



第8図 第77号住居跡出土遺物

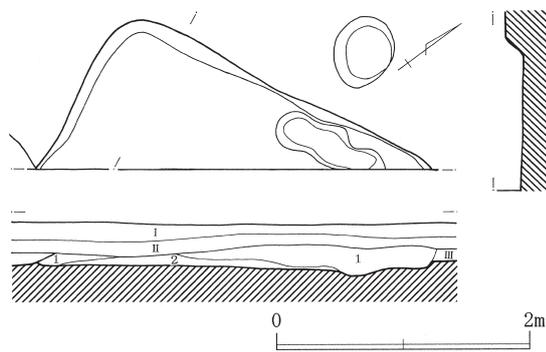
13	坏	A. 口縁部径 (13.2)、器高 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 1/2 弱。G. 口唇部は摩滅している。H. 床面付近。
14	坏	A. 口縁部径 (13.2)、残存高 4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 口縁部 1/4。H. 床面付近。
15	坏	A. 口縁部径 (11.2)、器高 4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-黒褐色。F. 3/4。H. 床面付近。

第78号住居跡（第9図、図版3）

F1区の中央やや北東側寄りに位置し、重複する第10号溝跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の西側の一部だけであるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部分がやや丸みを持つ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南西～北東方向が2.44mまで、北西～南東方向が1.38mまで測れる。北西側壁は、N-62°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜しながら立ち上がり、確認面からの深さは最高で14cmある。壁溝は、明確ではない。床面は、比較的平坦である。

出土遺物はほとんどなく、覆土中から土器の破片が1片出土しただけである。本住居跡の時期は、不明である。



第78号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子、径1cmの茶褐色ブロックを均一、ローム粒子、炭化物粒子、マンガン粒子、礫を少量、径3cmのロームブロックをまばらに含む。しまりやや弱く、粘性あり。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を非常に多く、白色粒子を均一、マンガン、炭化物粒子を微量含む。しまり、粘性あり。）

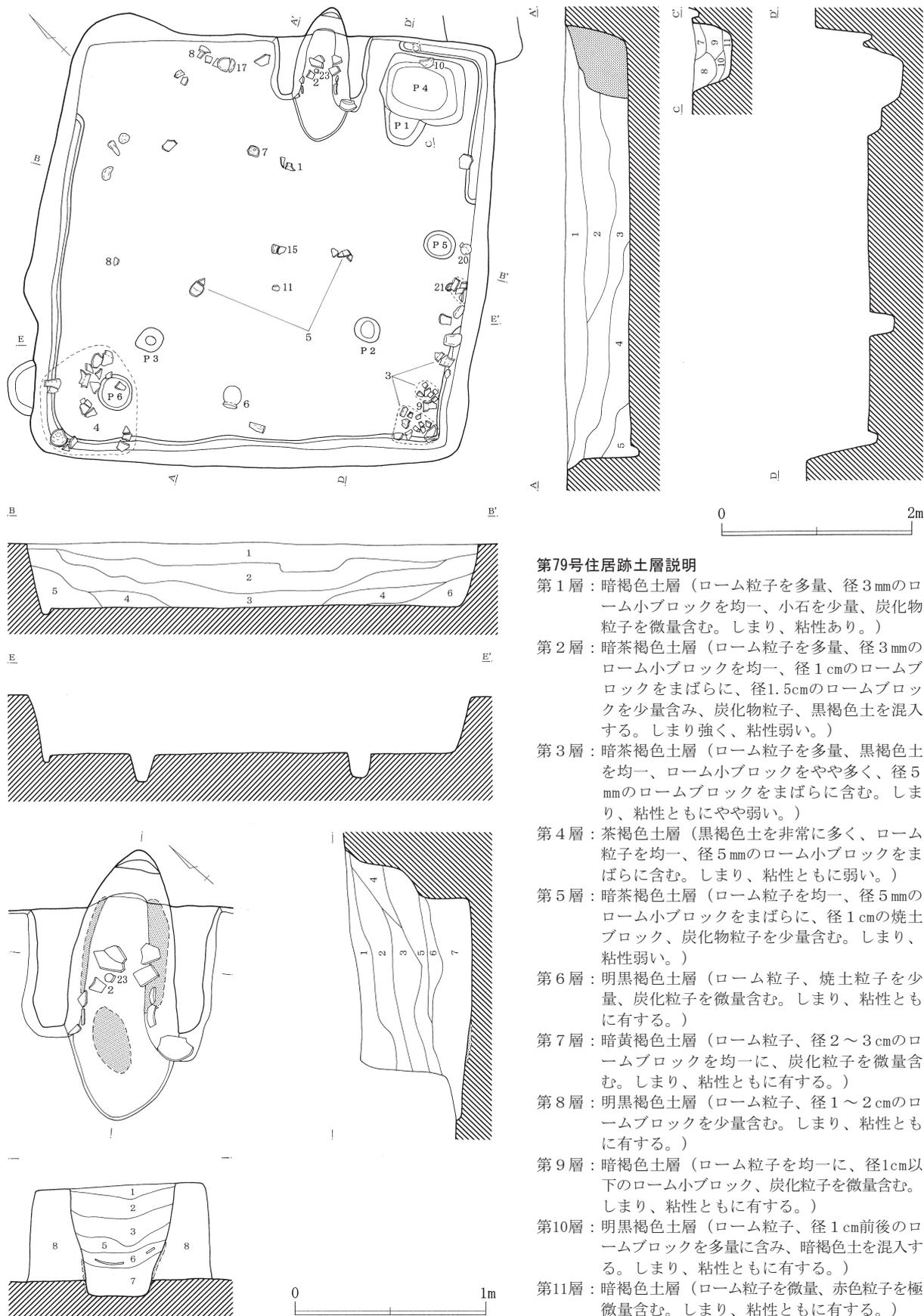
第9図 第78号住居跡

第79号住居跡（第10図、図版3）

F1区の中央やや南東側寄りに位置し、重複する第49号土層と第57号土層に切られている。

平面形は、コーナー部分がやや丸みをもつ方形を呈しているが、若干平行四辺形状に歪んでいる。規模は、北東～南西方向4.78m、北西～南東方向4.84m測る。住居の主軸方位は、N-45°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で66cmある。壁溝は、上幅13cm前後で床面からの深さが9cm程度の比較的均一な形態である。各壁下に見られるが、全周せず南西側壁以外は部分的か途切れている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっており、ほぼ平坦に作られている。ピットは、住居内から6箇所検出されている。P1～P3は、ほぼ住居の対角線上に位置しており、その配置から住居の4本主柱を構成する主柱穴と考えられる。いずれも30cm前後の円形ぎみの形態で、床面からの深さはそれぞれ18cm・26cm・30cmある。P4は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれているもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。90cm×66cmの長方形ぎみの形態で、床面からの深さは38cmある。P5は、住居南東側壁際の中央付近に位置する。28cm×34cmの円形ぎみの形態で、床面からの深さは15cm程度ある。P6は、住居西側コーナー部付近に位置する。38cm×36cmの円形ぎみの形態で、床面からの深さは10cm程度ある。

カマドは、住居北東側壁の中央やや南東側寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存長142cm、最大幅97cmを測る。燃烧部は、住居の壁をほとんど掘り込まず、ほぼ住居内



第10図 第79号住居跡

第79号住居跡カマド土層説明

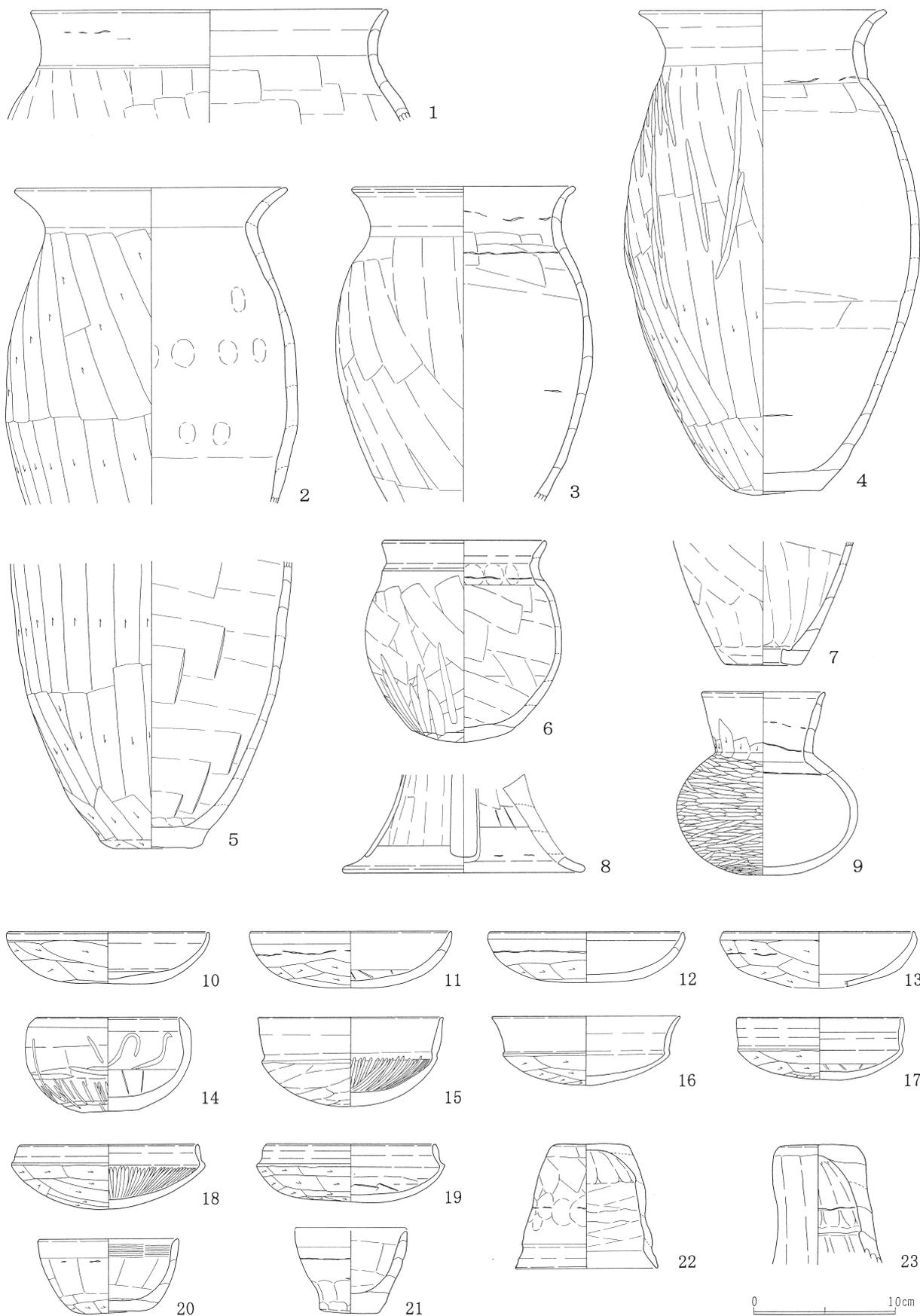
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第2層：明褐色土層（炭化粒子を少量、ローム粒、径1cm前後の焼土小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第3層：明褐色土層（ローム粒子、径1cm前後のロームブロックを均一に、炭化粒子、焼土粒子を少量含む。しまり、粘性とも有する。）
- 第4層：茶褐色土層（ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を少量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化粒子を少量、焼土粒子、径5mm前後の焼土小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第6層：明黒褐色土層（炭化粒子を均一に、焼土粒子を少量、ローム粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第7層：明黒褐色土層（焼土粒子、径5mm以下の焼土小ブロックを多量に、炭化粒子を均一に含み、灰分を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第8層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。しまり、粘性ともに有する。）

に位置している。内面は比較的良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は2面あり、それぞれのほぼ同一場所から支脚が据えられて出土している。最初の燃焼面である第1面は、住居の床面よりも10cm程度低く掘り込んでほとんど平坦に作られており、燃焼面のほぼ中央にNo22の鉢形の土製支脚が1個体置かれている。次の第2面は、カマド第7層の上面付近で住居床面よりも若干高く、燃焼部の奥壁に向かって若干傾斜している。第1面の支脚とほぼ同じ場所に、No23の鉢形か筒形の土製支脚が1個体据えられている。これらの支脚の位置からすると、本カマドにおける甕の掛け方は、2面とも1個単独であったと考えられる。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築しており、両袖の先端付近には土器の甕を伏せて補強にしている。煙道部は、すでに削平されており、その痕跡は見られない。

出土遺物は、住居の壁際の床面付近を中心に、比較的多くの土器が破片になって出土している。本住居跡の時期は、住居の形態や出土遺物から古墳時代後期の所産と考えられる。

第79号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (25.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面縦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 口縁部 1/4。H. 床面直上。
2	甕	A. 口縁部径 (15.0)、残存高 22.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-茶褐色、内-淡褐色。F. 1/2弱。H. カマド左袖内。
3	甕	A. 口縁部径 15.6、残存高 22.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデの後縦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 3/4。H. 床面直上。
4	甕	A. 口縁部径 17.4、器高 34.0、底部径 6.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデの後縦ナデ。底部外面外周ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-茶褐色、内-淡褐色。F. ほぼ完形。G. 胴部及び底部外面に黒斑あり。底部外面に木葉痕を残す。H. 床面付近。
5	甕	A. 底部径 7.2、残存高 20.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面縦ナデ。底部外面ナデの後外周ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/4。G. 胴部外面黒斑あり。H. 床面直上。
6	小形甕	A. 口縁部径 11.6、器高 14.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ後縦ナデ、内面縦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 完形。G. 外面に黒斑あり。H. 床面付近。
7	小形甕	A. 底部径 5.4、穿孔径 2.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ナデ、内面縦ナデ。底部外面ナデ。底部穿孔部内側ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-茶褐色、内-黒褐色。F. 底部のみ。H. 覆土中。
8	高 坏	A. 脚端部径 (17.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 脚部外面縦ナデ、内面縦ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗橙褐色。F. 3/4。G. 脚部に長方形の透孔を4箇所もつ。H. 覆土中。
9	直口壺	A. 口縁部径 8.6、器高 12.9。B. 粘土紐積み上げ(口縁部巻上げ)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後丁寧なミガキ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
10	坏	A. 口縁部径 (14.2)、器高 3.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
11	坏	A. 口縁部径 14.2、器高 4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面縦ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 3/4。H. 床面付近。



第11图 第79号住居跡出土遺物

12	坏	A. 口縁部径 (13.8)、器高 3.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、褐色粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 1/4。H. カマド内。
13	坏	A. 口縁部径 (13.4)、器高 3.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 口縁部 1/4 弱。H. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径 10.0、器高 6.7、底部径 3.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 2/3。G. 体部内外面に不規則的な暗文を施す。H. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径 13.0、器高 6.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデの後密な放射状暗文を施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 体部外面に黒斑あり。H. 床面直上。
16	坏	A. 口縁部径 13.2、器高 4.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
17	坏	A. 口縁部径 11.6、器高 4.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 体部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
18	坏	A. 口縁部径 12.6、器高 4.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデの後密な放射状暗文を施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 1/2 強。H. カマド内。
19	坏	A. 口縁部径 (12.0)、器高 4.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-暗褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
20	坏	A. 口縁部径 9.8、器高 5.3、底部径 4.0。B. 粘土紐輪積み。C. 口縁部内外面ヨコナデの後内面ハケ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面ナデの後外周ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 完形。H. 床面付近。
21	坏	A. 残存高 4.2、底部径 5.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 体部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 3/4。G. 底部内面斑点状剥落顕著。H. 床面直上。
22	土製支脚	A. 上端部径 5.4、器高 8.8、下端部径 10.0。B. 粘土紐輪積み。C. 上端部ナデ。体部外面ナデ、内面雑なナデ。下端部内外面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 完形。G. 上端部平坦面は二次焼成により赤色化している。内面煤付着。H. カマド燃焼面第 1 面支脚。
23	土製支脚	A. 上端部径 5.4、残存高 8.4。B. 粘土紐輪積み。C. 上端部ナデ。体部外面篋ナデ、内面指ナデ。D. 白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 上半のみ。H. カマド燃焼面第 2 面支脚。

第 2 節 土 壙

第40号土壙（第12図、図版4）

F 1 区の北東端に位置し、重複する第 9 号溝跡を切っている。調査区内で検出されたのは、土壙の南東側半分だけであるため、遺構の全容は不明である。平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、北東～南西方向 79cm、北西～南東方向は 94cm まで測れる。土壙の長軸方向は、N-37° -E を向いている。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは 20cm ある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が 1 片出土しただけである。

第41号土壙（第12図、図版4）

F 1 区の北東側に位置し、北側には第 40 号土壙が、南西側には第 42 号土壙が近接している。平面形は、70cm×63cm の円形に近い形態である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは 19cm ある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代と思われる土器片が 1 片出土しただけである。

第42号土壙（第12図、図版4）

F 1 区の北東側に位置し、北東側には第 41 号土壙が近接している。平面形は、94cm×88cm の円形

に近い形態である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは32cmある。底面は、平坦であるが、二段に深くなっている。出土遺物は、覆土中から縄文時代中期後半(加曾利E式)の土器片が1片出土しただけである。

第43号土壙（第12図、図版4）

F1区の中央付近に位置し、重複する第10号溝跡を切っている。平面形は、82cm×63cmの東西方向に長い長方形を呈し、中に円形ぎみの小ピットを伴っている。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の甕の破片が2片出土しただけである。

第44号土壙（第12図、図版4）

F1区の中央付近に位置し、重複する第45号土壙を切っている。平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ長方形を呈している。規模は、南北方向260cm、東西方向112cmを測る。長軸方向は、N-8°-Wを向いている。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さ52cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第45号土壙（第12図、図版4）

F1区の中央付近に位置し、重複する第44号土壙に切られている。平面形は、コーナー部が丸みを持つやや不整の長方形を呈している。規模は、北西～南東方向210cm、北東～南西方向160cmを測る。長軸方向は、N-46°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第46号土壙（第12図、図版4）

F1区の中央部やや南西側寄りに位置する。平面形は、133cm×119cmの楕円形ぎみの形態を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは58cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代中期後半(加曾利E式)の土器片1片と古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第47号土壙（第12図、図版4）

F1区南西側に位置する。平面形は、135cm×130cmの円形ぎみの形態を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは48cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第48号土壙（第12図、図版5）

F1区の南西端に位置する。調査区内で検出されたのは遺構の北西側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形を呈するものと思われる。規模は、北東～南西方向162cm、北西～南東方向は63cmまで測れる。壁は、直線的

にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは68cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第49号土壌（第12図）

F 1 区の中央付近に位置し、重複する第79号住居跡を切っている。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、北西～南東方向56cm、北東～南西方向61cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは37cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第50号土壌（第12図、図版 5）

F 1 区の南西側に位置する。調査区内で検出されたのは遺構の北西側半分だけであるため、本土壌の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形か長方形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が106cmまで、南北方向が86cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは8cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が1片出土しただけである。

第51号土壌（第12図、図版 4）

F 1 区の中央付近に位置し、重複する第10号溝跡に切られている。平面形は、54cm×51cmの円形を呈している。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第52号土壌（第12図）

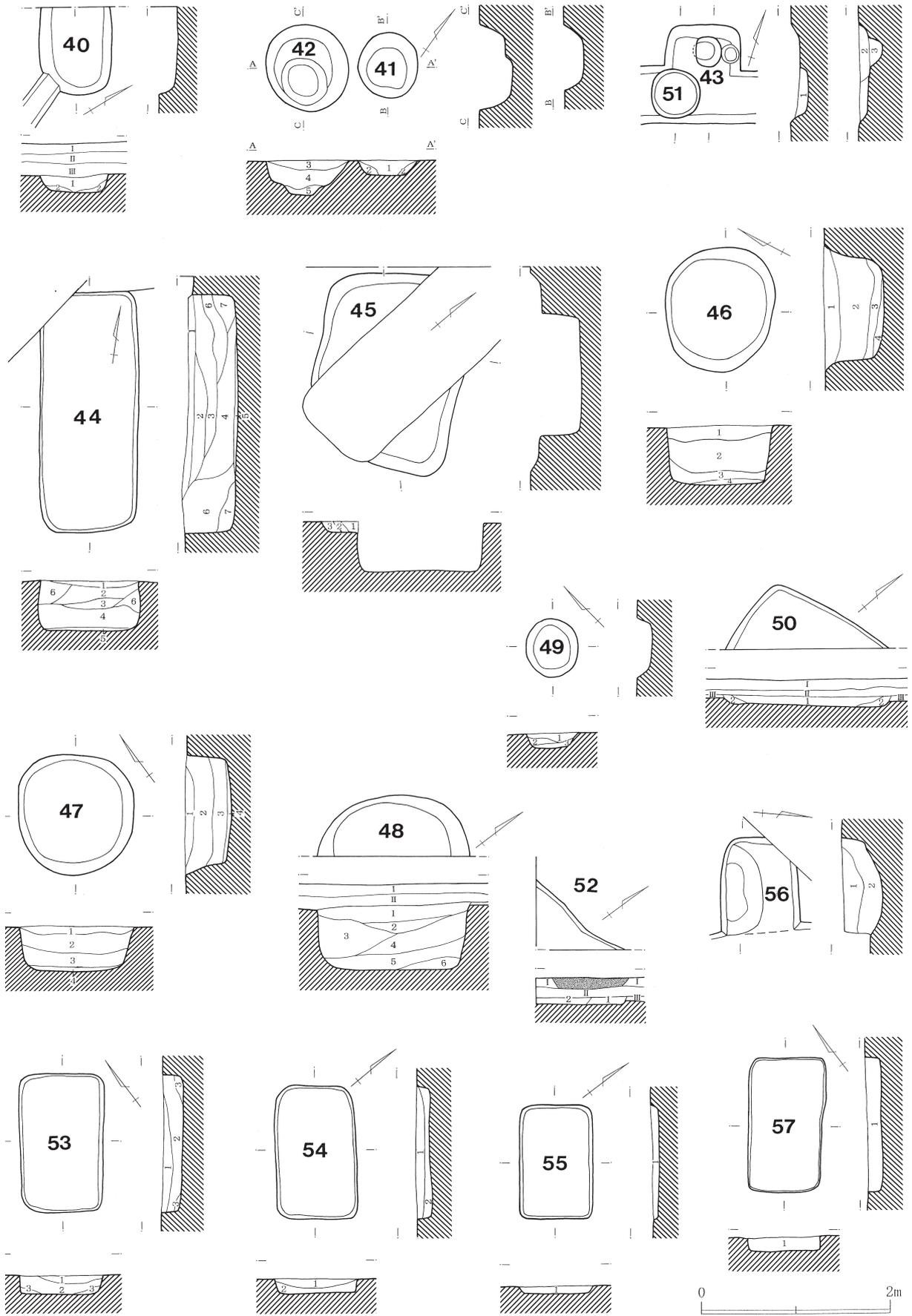
F 1 区の南西端に位置する。調査区内で検出されたのは、遺構の北側の一部だけであるため、本土壌の全容は不明である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは5cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第53号土壌（第12図、図版 5）

F 2 区の中央付近に位置する。平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ長方形を呈している。規模は、北東～南西方向148cm、北西～南東方向90cmを測る。長軸方向は、N-36° -Eを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第54号土壌（第12図、図版 5）

F 2 区の中央付近に位置する。平面形は、コーナー部が丸みを持つ長方形を呈している。規模は、北東～南西方向88cm、北西～南東方向140cmを測る。長軸方向は、N-38° -Wを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは7cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が2片出土しただけである。



第12图 土 壺

第40号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（白色粒子を均一、小石、ローム粒子、ローム小ブロックを少量含む。しまりやや弱く、粘性なし。）

第2層：茶褐色土層（白色粒子、ローム粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。しまりやや弱く、粘性は強い。）

第41・42号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を非常に多く、白色粒子を均一、径2cmのロームブロック、径3mmのローム小ブロックを少量含む。しまり弱く、粘性なし。）

第2層：黄褐色土層（ローム粒子を主体とし、白色粒子を均一、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともになし。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を非常に多く、白色粒子を均一、径3mmの炭化物粒子を少量含む。しまりはあるが、粘性なし。）

第4層：茶褐色土層（ローム粒子を多量、白色粒子を均一、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径2cmのロームブロック、炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第43・51号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（径3mmの褐色土小ブロックを微量、ローム粒子を均一、白色粒子をまばらに含む。しまりやや弱い、粘性あり。）

第2層：暗褐色土層（径3mmのローム小ブロックを均一、炭化粒子、白色粒子を微量含む。しまり、粘性ややあり。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに弱い。）

第44号土壌土層説明

第1層：灰茶褐色土層（径3mmのローム小ブロックを均一、ローム粒子、径1cmのロームブロックを少量、As-Aを多量含む。しまりはあるが、粘性なし。）

第2層：暗褐色土層（径3mmのローム小ブロックを均一、ローム粒子、As-Aを多量、径1～1.5cmのロームブロックを少量含む。しまり、粘性ほとんどなし。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径5mmのローム小ブロックを均一、As-Aを微量含む。しまり、粘性ともになし。）

第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径1cmのロームブロックを均一に含み、灰褐色土を混入する。しまり、粘性ともに弱い。）

第5層：茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。しまり、粘性やや強い。）

第6層：暗黄灰褐色土層（ローム粒子を主体とし、小石、マンガン粒子、As-Aを少量含む。しまり弱く、粘性なし。）

第7層：暗黄灰褐色土層（ローム粒子を主体とし、マンガン粒子を少量、As-Aを微量含む。しまり弱く、粘性なし。）

第45号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化粒子を微量含む。しまりは有するが、粘性はやや弱い。）

第2層：明褐色土層（ローム漸移層の風化したもの。若干のローム粒を含む。しまりを有するが、粘性は弱い。）

第3層：明黒褐色土層（ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第46号土壌土層説明

第1層：灰茶褐色土層（ローム粒子を多く、ローム小ブロックをまばらに、炭化物粒子、砂礫を少量含む。しまりは有するが、粘性なし。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径8mmのロームブロック、礫、炭化物を少量、径3mmのローム小ブロックをやや多く含む。しまり、粘性ともやや強い。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径8mmの灰褐色土ブロックをやや多く含む。しまり、粘性ともに強い。）

第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量、白色粒子、炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第47号土壌土層説明

第1層：灰茶褐色土層（径2mmのローム粒子を非常に多く、径4mmのローム小ブロックをまばらに、径1cmのロームブロックを少量、白色粒子を均一に含む。しまり、粘性ともにやや弱い。）

第2層：黒褐色土層（径4mmのローム小ブロックを均一、ローム粒子を多量、白色粒子、礫を少量、径4mmの焼土小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともにやや弱い。）

第3層：茶褐色土層（ローム粒子を均一、径4mmのローム小ブロック、白色粒子、炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）

第48号土壌土層説明

第I層：灰褐色土層（As-A、マンガン粒を含む。しまり、粘性ともになし。現耕作土。）

第II層：暗褐色土層（As-Aを非常に多く、小石、マンガン、ローム粒子、径5mmのローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ほとんどない。旧耕作土。）

第III層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一、白色粒子をやや多く含む。しまり、粘性ともに強い。）

第1層：茶褐色土層（径3mmのローム小ブロックを多量、ローム粒子を均一、小石、マンガンを少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを均一、マンガン粒子をやや多く含む。しまり、粘性ともやや強い。）

第3層：茶褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径5mmのローム小ブロック、径1cmのロームブロックを均一に、小石を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を主体とし、径3mmのローム小ブロック、径7mmのロームブロックを少量含む。しまり強く、粘性なし。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径3mmのローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第6層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第49号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子、砂礫を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第2層：茶褐色土層（ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第50号土壌土層説明

第1層：灰茶褐色土層（ローム粒子を均一、径3cmのロームブロック、小石を少量、マンガン粒子を多量含む。しまりは有するが、粘性は弱い。）

第2層：茶褐色土層（径1.5cmのロームブロックを少量、マンガン粒子、径3mmのローム小ブロックをやや多く含む。しまり弱く、粘性強い。）

第51号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第52号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径3mmのローム小ブロックを少量含む。しまりやや弱く、粘性やや強い。）

第2層：暗褐色土層（径3mmのローム小ブロックをやや多く、ローム粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第53号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（径5mmのロームブロックを均一、径3cmのロームブロックをまばらに、ローム粒子を多量、マンガン粒子を微量含む。しまりは弱い、粘性は強い。）

第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径3mmのローム小ブロックを均一、径5mmのロームブロックをまばらに、小石を少量含む。しまりは弱い、粘性は強い。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロック、径5mmのロームブロックを少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第54号土壌土層説明

第1層：黒褐色土層（径3mmのローム小ブロックを均一、マンガン粒子をまばらに、径5mmのロームブロックを微量含む。しまりは強い、粘性なし。）

第2層：黒褐色土層（径5mmのロームブロックを均一、径1cmのロームブロック、ローム粒子、マンガン粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第55号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一、マンガン粒子をまばらに、ローム粒子、径3mmのローム小ブロックを少量含む。しまりは有するが、粘性なし。）

第56号土壌土層説明

第1層：暗橙褐色土層（白色粒子、マンガン粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子、径2cm前後のロームブロック、マンガン粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第57号土壌土層説明

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子、径1～2cmのロームブロックを均一に、炭化粒子、白色粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第55号土壌（第12図、図版5）

F2区の南西側に位置し、重複する第76号住居跡を切っている。平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ長方形を呈している。規模は、北東～南西方向78cm、北西～南東方向110cmを測る。長軸方向は、N-34°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは8cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第56号土壌（第12図、図版5）

F2区の南西側に位置し、重複する第76号住居跡に切られている。平面形は、残存する部分から推測するとコーナー部がやや丸みを持つ長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向43cm、

東西方向は102cmまで測る。長軸方向は、N-80° -Eを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42cmある。底面は、広いが南側の一部が丸みをもって深くなっている。遺物は、何も出土しなかった。本土壌の時期は、第76号住居跡に切られていることからすると、縄文時代中期の可能性も考えられる。

第57号土壙（第12図、図版5）

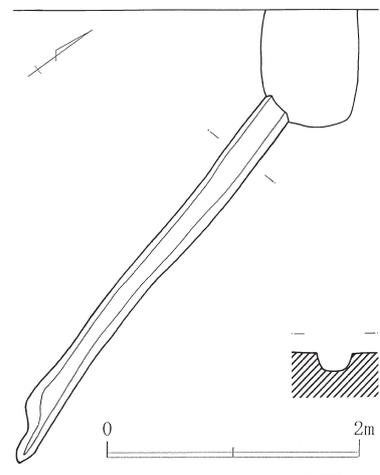
F 1 区の中央付近に位置し、重複する第79号住居跡を切っている。平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ長方形を呈している。規模は、北東～南西方向288cm、北西～南東方向155cmを測る。長軸方向は、N-44° -Eを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは33cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第3節 溝 跡

第9号溝跡（第13図、図版5）

F 1 区の北東側に位置し、重複する第40号土壙に切られている。形態は、上幅25cm前後、底面14cm前後の比較的均一な幅で、ほぼ南北方向に向いて直線的な流路をとっており、溝の南端は調査区内で途切れている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。底面は、全体的に平坦である。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。



第13図 第9号溝跡

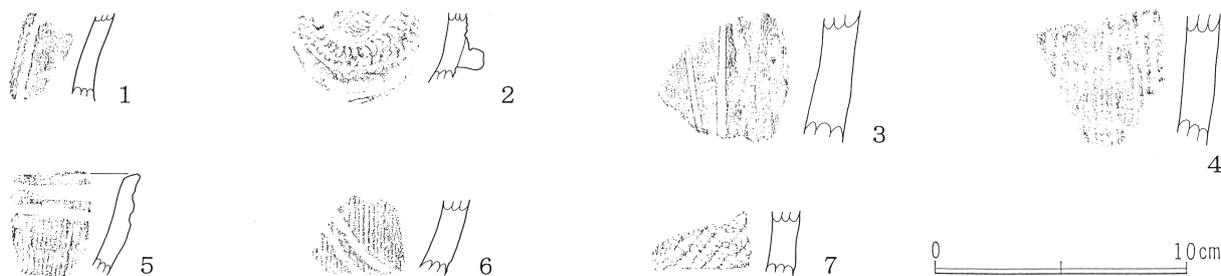
第10号溝跡（第5図）

F 1 区の中央付近に位置し、重複する第78号住居跡と第51号土壙を切り、第43号土壙に切られている。形態は、上幅55cm前後、底面35cm前後の比較的均一な幅で、ほぼ東西方向に向いて直線的な流路をとっている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは8cmある。底面は、広く平坦である。本溝跡は、F 1 区北東側の第9号溝跡とほぼ直角の流路をとっており、おそらく両溝跡は同時期で有機的な関係を持っていたと思われる。

出土遺物は、覆土中から縄文時代中期後半の土器片が1片出土しただけである。

第4節 その他の遺物

調査区内からは、後世の遺構の覆土に混入して、縄文時代中期の土器片が少量ながら出土している（第14図）。これらの土器片は、いずれも中期中頃から後半のもので、本遺跡の北東側に近接する大規模環状集落の将監塚遺跡（石塚1986）・古井戸遺跡（宮井1989）や南西側に近接する新宮遺跡（恋河内1995）の集落経営時期と概ね一致しており、それらの活動領域と関係するものであろう。

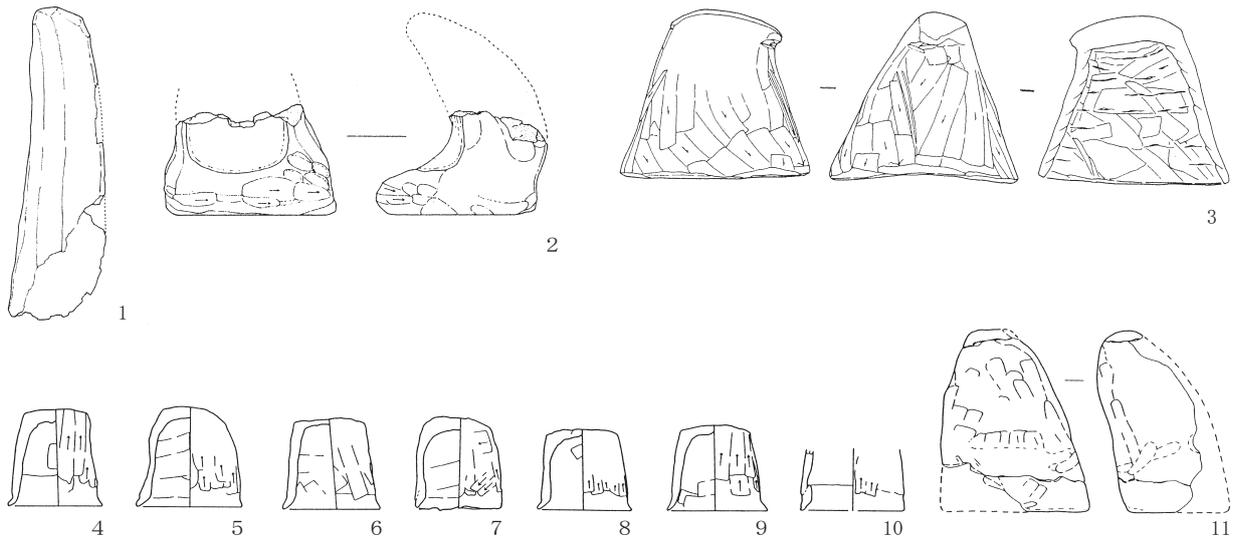


第14図 調査区内出土の縄文土器

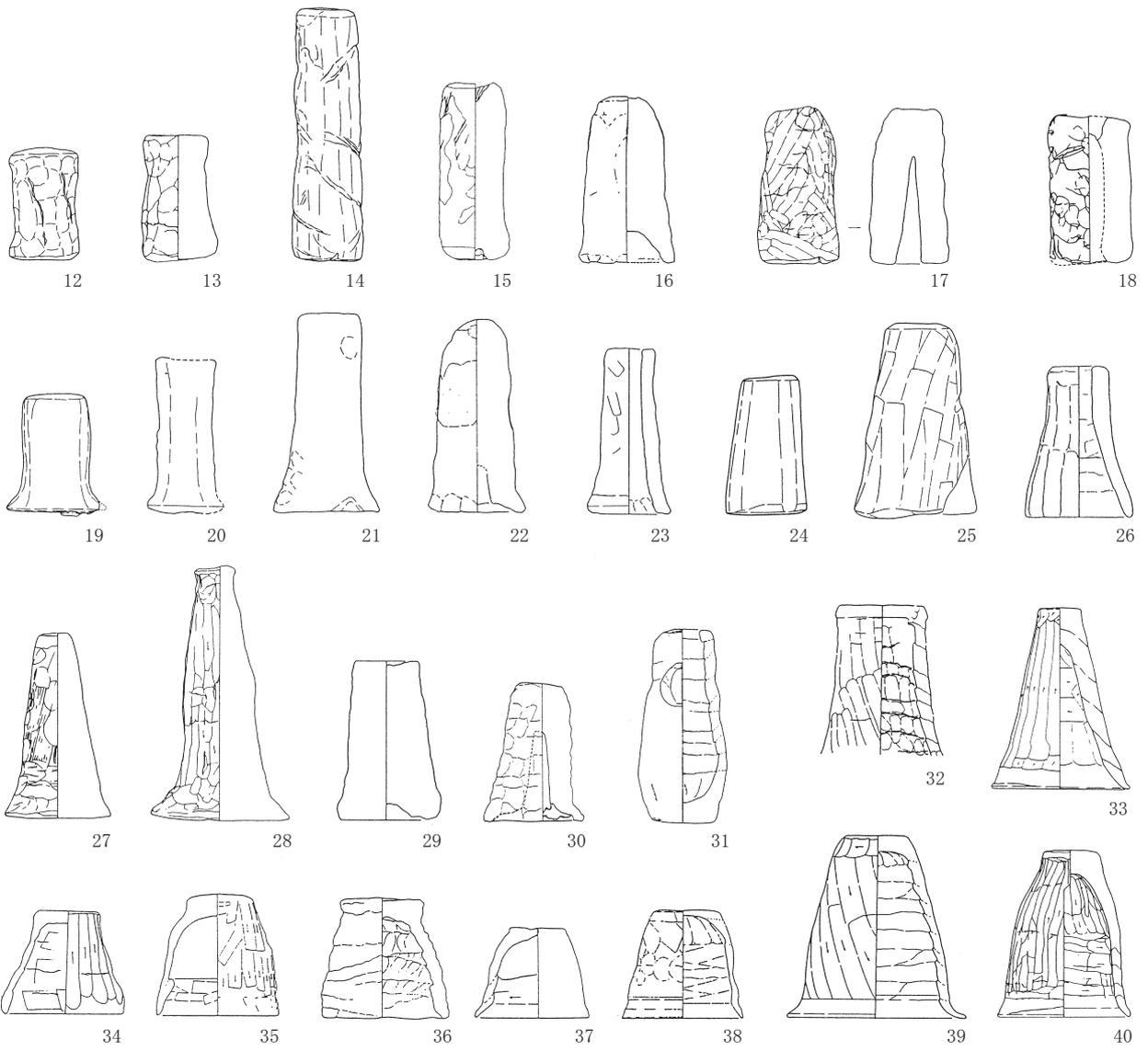
調査区内出土の縄文土器観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ナデ。外面に押し引きによる沈線を施す。D. 金雲母、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 破片。G. 阿玉台式。H. 第77号住居跡覆土。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ミガキ。外面に粘土紐貼り付けによるキザミを伴う円状の隆帯をもち、その内外を沈線により縁取る。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 破片。G. 勝坂式。H. 第79号住居跡覆土。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ミガキ、内面ナデ。外面に縦区画沈線による無文帯と長いハの字状の縦走綾杉文を施す。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 唐草文系。H. 第42号土壙覆土。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面平行条線、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-淡橙褐色、内-暗橙褐色。F. 破片。G. 器表面は荒れている。H. 第10号溝跡覆土。
5	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ナデの後節の細かい撚糸文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 破片。H. 第46号土壙覆土。
6	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ナデの後平行条線、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 外-茶褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 連弧文系。H. 第79号住居跡覆土。
7	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面単節縄文(LR)、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 破片。G. 加曾利E式。H. 第79号住居跡カマド内。





(炉に伴う土製専用支脚)



(カマドに伴う土製専用支脚)

第15図 児玉地方の土製専用支脚

第V章 児玉地方の土製支脚について -第79号住居跡出土の土製専用支脚とその周辺-

1. はじめに

本遺跡が所在する児玉地方は、東日本の中でもカマドの出現と普及が比較的早い地域で、現在のところ古墳時代中期の5世紀前半(第2四半期)にはカマドが出現し、5世紀後半(第3四半期)以降には集落を構成する各住居にカマドが普及しほぼ定着している。これらのカマドには、その出現当初より高坏を伏せて再利用した土器転用支脚をもつものが多いが、後期の6世紀以降になると、河床礫を使用した石製支脚以外では、柱状を呈する土製の専用支脚が支脚の主体を占めるようになる。

2. 土器転用支脚

土器転用支脚は、カマドの出現当初から高坏が主流であったが、5世紀末以降になるとあまり高坏に固執しなくなり、適当な大きさのものであれば高坏以外にも坏・小形鉢・小形甕などを伏せて代用したり、変わった器種では5世紀末頃の本庄市諏訪遺跡第46号住居跡(柿沼・小久保1979)で直口壺を正位に据えて代用したり、6世紀末頃の深谷市宮ヶ谷戸遺跡第16号住居跡(中山1995)で高さ12.4cmの小形の壺を伏せて代用した例もある。また、特異な例では、石製支脚と土器を組み合わせたものも見られる。早い段階では5世紀前半の本庄市(旧児玉町)東牧西分遺跡第41号住居跡(恋河内1995)で扁平な石を2個重ねた上に高坏を伏せた例があり、5世紀末以降では本庄市(旧児玉町)辻堂遺跡第13号住居跡(恋河内1996)や深谷市(旧岡部町)六反田遺跡第9号住居跡(梅沢・石岡1981)及び深谷市(旧岡部町)砂田前遺跡第11・25・33号住居跡(佐藤1998)などのように、石製支脚の上に坏を1～3個体重ねて被せたもの、六反田遺跡第40号住居跡(梅沢・石岡1981)や上里町若宮台遺跡第36号住居跡(大和 他1983)などのように、石製支脚の上に小形甕や甕の底部を被せたもの、あるいは砂田前遺跡第41号住居跡(佐藤1998)のように、石製支脚を小形甕の上半で覆った例などがある(注1)。

3. 炉に伴う土製専用支脚

土製専用支脚は、全国的には西日本の一部地域で弥生時代の早い段階から見られるが、児玉地方ではカマド出現以前の炉を有する古墳時代前期末～中期初頭頃の一部の住居跡で出土しており、おそらくそれらが現在のところ当地方での初源と思われる。それらの支脚は、いわゆる「五徳状土製品」(立石他1983)あるいは「角状支脚」(中村1987)と呼ばれるもの(以下角状支脚と言う)や、土器と同じように粘土紐を積み上げて成形した「コップ形土器」(丸山・中沢1998)と呼ばれる小形のもの(以下コップ形支脚と言う)で、いずれも数個セットで使用されたと考えられている。前者の角状支脚は、粘土塊を手で捏ねて成形した手捏成形のものが、前期末の本庄市(旧児玉町)後張遺跡(立石他1982)第

1. 後張74住、2. 後張131住、3. 夏目23住、4～11. 猪俣北古墳群内36住、12. 大久保34住、13. 今井川越田43住、14. 金佐奈117住、15. 今井川越田88住、16. 社具路72住、17. 今井原屋敷45住、18. 今井川越田35住、19. 後張92住、20. 鍛冶屋峯23住、21. 鍛冶屋峯55A住、22. 社具路80住、23. 鍛冶屋峯34住、24. 南街道43住、25. 浅見境北34住、26. 今井川越田269住、27. 今井川越田19住、28. 今井川越田74住、29. 上野62住、30. 東谷35住、31. 社具路34住、32. 塩谷下大塚9住、33. 雷電下表採、34. 後張127住、35. 猪俣北古墳群内52住、36. 東谷23住、37. 猪俣北古墳群内63住、38. 塚島79住、39. 上野4住、40. 今井川越田62住

74号住居跡(第15図No 1)、同じく中期初頭の第20号住居跡・第72号住居跡・第95号住居跡・第131号住居跡(第15図No 2)・第162号住居跡などで破片が出土しており、粘土紐を積み上げて成形したものが、中期前半～中頃の本庄市夏目遺跡第23号住居跡(大谷2007)で3～4個体分出土している(第15図No 3)。後者のコップ形支脚は、現在までのところ中期初頭頃の美里町猪俣北古墳群内第36号住居跡(丸山・中沢1998)から角状支脚の破片(第15図No11)とともに6個体以上がまとまって出土しているだけである(第15図No 4～10)。

児玉地方では、このような炉に伴う土製専用支脚は極めて少なく、集落内でも特定の住居に限られる傾向があることから、煮沸の補助具として普及し、当地方で一般的に使用されていたとは考えられない。

4. カマドに伴う土製専用支脚

児玉地方のカマドに伴う土製専用支脚は、柱状の形態のもの(柱状支脚)と鉢形の形態のもの(鉢形支脚)が見られる。

a. 柱状支脚

柱状支脚(第15図No12～30)は、基本的に上下の太さがあまり変わらない形状のA形(第15図No12～23)と、上方に向かって細くなる形状のB形(第15図No24～30)があり、それぞれ下端が開かない形状のI型(A I型:第15図No12～18、B I型:第15図No24～26)と、下端が開く形状のII型(A II型:第15図No19～23、B II型:第15図No27～30)に分けられ、極少数ではあるがA形には上端と下端の両方

名称	形	型	1類	2類	3類	4類	5類
柱状支脚	A	I					
		II					
	B	I					
		II					

名称	型	
鉢形支脚	I	
	II	

第16図 児玉地方出土の土製専用支脚形態分類図

が開く形状のⅢ型が見られる(注2)。そして、それらはさらに中実で上下両端が平坦なもの(1類)、中実で上下両端が窪むもの(2類)、中実で下端だけが窪むもの(3類)、中空で上端が貫通しないもの(4類)、中空で上端が貫通するもの(5類)に細別でき、5類はさらに上端が筒状に貫通するもの(5類a)と、穿孔を施すもの(5類b)がある(第16図)。成形技法は、粘土塊を捏ねて成形した手捏成形と、粘土紐を輪積みか巻き上げて成形した粘土紐積み上げ成形の二者がある。手捏成形は、主に中実の1類～3類のものであるが、4類と5類の中にも手捏成形のものに棒状の道具を刺し込んで中空にするものが存在する。この中実の手捏成形の支脚は、概ねその製作は単純で特別な技法等は見られないことから、専門的な工人の製作というよりは、必要に応じて自給的に製作されたものと思われる。粘土紐積み上げ成形は、主に中空の4類と5類のもので、内面に粘土紐の積み上げ痕を残すものが多い。この粘土紐積み上げ成形の柱状支脚は、地域は異なるが深谷市城北遺跡第19号住居跡(山川1995)出土の支脚(BⅡ型5類a)や川越市上組Ⅱ遺跡第18号住居跡(黒坂1989)出土の支脚(AⅡ型5類a)のように、上端の平坦面に土師器甕の底部外面によく見られるのと同様の木葉痕を残すものがあり、また城北遺跡ではBⅡ型4類(第26・145号住居跡)やBⅡ型5類a b(第19・28号住居跡)の支脚のヨコナデした下端部に、城北遺跡のⅢ・Ⅳ期の土師器甕や甑などの口縁に特徴的ないわゆる「城北型口縁」の形状を作出したのが見られるなど、これらの支脚の製作に土師器工人が関わっていたことが考えられる。

児玉地方の柱状支脚の形状は、古墳時代後期を通じてA形が主流で、Ⅰ型とⅡ型の量的な差はあまりないが、いずれも中実の1類が主体を占めている。土製専用支脚が量的に増加する6世紀後半～7世紀初頭になると、B形も一定の量を占めるようになるが、これもA形と同じくⅠ型とⅡ型の量的な差はあまりなく、中実の1類が主体を占めている。これに対して、古墳時代後期集落の調査例が豊富で児玉地方に近い深谷市北部地域では、多少集落差があるものの、6世紀前半はA形とB形は量的にはほぼ半々の集落が多く、6世紀後半になると土敷免遺跡(瀧瀬・山本1993)のようにA形が多くなる集落と新屋敷東遺跡(田中1992)や砂田前遺跡(岩瀬1991、佐藤1998)のようにB形が多くなる集落があるが、AB両形とも後期を通じてⅡ型がやや多い傾向にあり、中空の4・5類が主体を占める特徴が見られ(注3)、児玉地方とは柱状支脚の様相において、明確な地域差が認められる。このA形が主流でAB形とも中実の1類を主体とする児玉地方と、AB形とも中空の4・5類を主体とする深谷市北部地域の地域差については、その成形技法の差に見られる製作者(集団)の性格の差と、支脚という物の流通形態の特質を反映していると思われるが、この柱状支脚に見られる地域差が旧郡のエリアに近い範囲である可能性が高い点は、古墳時代後期の小地域性を考える上で注目されよう。

b. 鉢形支脚

鉢形支脚(第15図No34～40)は、土器の小形鉢に類似しているが、該期の特定器種の転用や模倣ではなく支脚専用として作られているため、古墳時代後期の土器としてはやや違和感のあるローカル色の濃い形をしており、内外面の調整も一般の土器に比べてかなり雑なものが多い。形状は、概ね下端にヨコナデを施さず体部から外反しないⅠ型(第15図No34～36)と、下端にヨコナデを施して土器の口縁部のように緩やかに外反させるⅡ型(第15図No37～40)に分けられる(第16図)。成形技法は、一般的な鉢や甕などの土器と同じく、粘土円盤上で粘土紐を積み上げる粘土紐積み上げ成形で、内面に粘土紐の積み上げ痕を残すものが多い。形状や製作技法的には、カマド出現以前の炉に伴うコップ形支脚

に類似しており、あるいはその系譜を引いたものである可能性も考えられる。

この鉢形支脚は、柱状支脚に比べて非常に少なく、現在のところその分布は児玉地方とそれに隣接する旧榛沢郡(旧岡部町)の一部に集中する傾向が見られる(注4)。おそらく、柱状支脚の4類や5類の粘土紐積み上げ成形の支脚と同じく、その製作には土師器工人が関係していたものと推測されるが、その量の少なさや分布範囲から見て、かなりローカルのなものであったと思われる。

5. おわりに

児玉地方では、柱状支脚・鉢形支脚とも5世紀後半～末頃には出現し(注5)、鉢形支脚は6世紀末～7世紀初頭頃まで、柱状支脚は6世紀後半～7世紀初頭のピークを境に、以後量を減じながら7世紀末～8世紀前半頃まで確認できる(注6)。これらの柱状支脚と鉢形支脚は、6世紀前半頃まではいずれも比較的小形のものが主体であるが、6世紀後半以降になると各類型とも長大化したものが多くなる傾向が見られる。この変化は、おそらくこの時期の甕の長胴化と連動したものと思われ、煮沸における熱効率との関係によるものであろう。その後、8世紀後半以降になると土製支脚はほとんど見られなくなり、カマドの補強材に石材を多用するようになる9世紀以降には、支脚は石製のものが主流になるようである(注7)。この8世紀以降に見られる土製支脚の急速な減少と石製支脚への全面的な移行の要因の一つとしては、おそらくカマドの支脚に最適であった棒状の河床礫を大量消費していた当地方の古墳造営の終焉により、河川からやや離れた集落においてもカマド構築の補強材とともに棒状河床礫などの石材の入手が比較的容易になったことがあげられよう。

注

- (1) なぜ石製支脚の上に土器を被せるのかその理由はよく分からないが、単純な使用目的としては、石製支脚の上端と甕底部の接点が不安定なため、甕を据える微調整のため、熱せられて高温化する石製支脚との緩衝材のためなどが考えられる。しかしながら、これらの検出例で上に甕が据えられた状態のものがあまりないことや、石製支脚の上に被せた土器に被熱などの使用痕が見られないものがあることからすると、あるいはカマドの廃棄に伴う儀礼的行為などの例も含んでいる可能性も考えられる。ちなみに土製専用支脚の場合には、児玉地方周辺ではこのような土器を被せる例はほとんどなく、管見に触れたものでは砂田前遺跡第7号住居跡(佐藤1998)で、中空のB形土製支脚の上に模倣坏を3個体重ねて被せた報告例があるだけである。
- (2) III型は、現在までのところ児玉地方周辺では、上里町臺遺跡第60号住居跡(中村他1980)と六反田遺跡第93号住居跡(梅沢・石岡1981)で明確なものが出土しているだけである。
- (3) 6世紀を通じて、量的には4類よりも5類の方がやや多い傾向が見られる。
- (4) 児玉地方の鉢形支脚の類例は、現在のところ第15図のNo34～40がほとんどすべてであり、その他の地域では隣接する旧榛沢郡の砂田前遺跡第71号住居跡(岩瀬1991)からII型が1個体出土しているだけである。
- (5) 児玉地方のカマドに伴う土製専用支脚で最も古い例は、現在までのところ柱状支脚ではB形で中空の本庄市(旧児玉町)塩谷下大塚遺跡E地点第9号住居跡出土例(第15図No32)とA形かB形で中実の第17号住居跡出土例(恋河内・松澤2006)、鉢形支脚ではII型の美里町猪俣北古墳群

内第63号住居跡(丸山・中沢1998)出土例(第15図No37)と思われる。

- (6) 現在のところ、鉢形支脚はⅡ型の本庄市今井川越田遺跡第62号住居跡(磯崎1995)出土例(第15図No40)が伴出した土器から見て最も新しいものと思われ、柱状支脚は本庄市(旧児玉町)雷電下遺跡表採例(恋河内1999)のBⅠ型4類(第15図No33)が7世紀後半頃、隣接する旧榛沢郡の深谷市(旧岡部町)白山遺跡第34号住居跡(中村1989)出土のBⅠ型4類や同じく熊野遺跡B区第27号住居跡(赤熊2000)出土のBⅠ型4類か5類と同じく上宿遺跡第6号住居跡(鳥羽他2005)出土のA形が8世紀初頭～前半頃のものである。
- (7) 現在のところ、土製専用支脚で最も新しい時期の出土例は、周辺地域では10世紀代の深谷市宮ヶ谷戸遺跡第13号住居跡(青木1995)の覆土中から出土した古墳時代のものと同じ形状の支脚(AⅠ型1類)であるが、9世紀以降の平安時代になると土製支脚はほとんど確認できない。

<参考文献>

- 青木 克尚 (1995) 『砂田／天神／宮ヶ谷戸遺跡Ⅱ』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
- 赤熊 浩一 (1988) 『将監塚・古井戸Ⅱ 一歴史時代編Ⅱ一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- (2000) 『熊野／新田』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第251集
- 石塚 和則 (1986) 『将監塚 一縄文時代一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 磯崎 一 (1995) 『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集
- 井上 尚明 (1986) 『将監塚・古井戸Ⅰ 一古墳・歴史時代編Ⅰ一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 岩瀬 譲 (1991) 『樋詰・砂田前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集
- 梅沢太久夫・石岡憲雄(1981) 『六反田』 六反田遺跡調査会 埼玉県立歴史資料館
- 大谷 徹 (2007) 『夏目／夏目西／弥藤次』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集
- 柿沼 幹夫・小久保 徹 (1978) 『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集
- (1979) 『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
- 黒坂 禎二 (1989) 『上組Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
- 恋河内昭彦 (1995) 『南共和・新宮遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第4・5集
- (1995) 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財調査報告書第17集
- (1996) 『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第19集
- (1996) 『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第20集
- (1999) 『雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡』 児玉町文化財調査報告書第32集
- (2003) 『大久保遺跡 一B地点の調査一』 児玉町遺跡調査会報告書第14集
- 恋河内昭彦・松澤浩一 (2006) 『金屋下別所遺跡B地点・塩谷平氏ノ宮遺跡・塩谷下大塚遺跡E地点』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 佐藤 康二 (1998) 『砂田前遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集

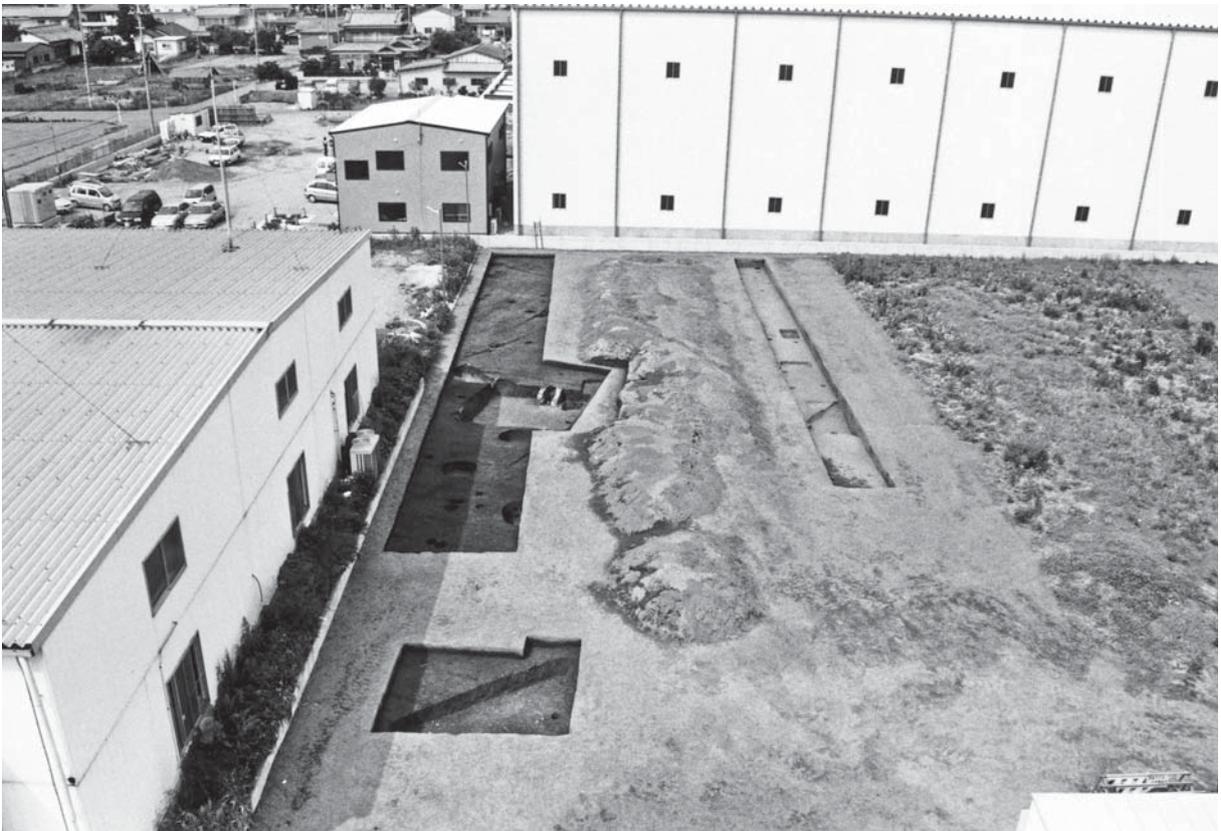
- 鈴木 徳雄 他 (1991) 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
- 瀧瀬 芳之 (1997) 『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 瀧瀬 芳之・山本 靖 (1982) 『上敷免遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 立石 聖詞 他 (1982) 『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
 (1983) 『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 田中 広明 (1992) 『新屋敷東・本郷前東』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 鳥羽 政之 他 (2005) 『上宿遺跡 —B地点の調査—』 埼玉県大里郡岡部町遺跡調査会報告書第14集
- 中村 倉司 (1987) 「弥生時代における甕形土器の煮沸方法と熱効率」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学会
 (1989) 『白山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告第17集
- 中村 倉司 他 (1980) 『臺遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第41集
- 中山 浩彦 (1995) 『宮ヶ谷戸／根岸／八日市／城西』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第172集
- 伴瀬 宗一 (1996) 『今井川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
- 丸山陽一・中沢良一 (1998) 『猪俣北古墳群・引地遺跡・滝ノ沢遺跡』 美里町遺跡発掘調査報告書第9集
- 宮井 栄一 (1989) 『古井戸 —縄文時代—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 山川 守男 (1995) 『城北遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
- 大和 修 他 (1983) 『若宮台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第28集



写 真 图 版



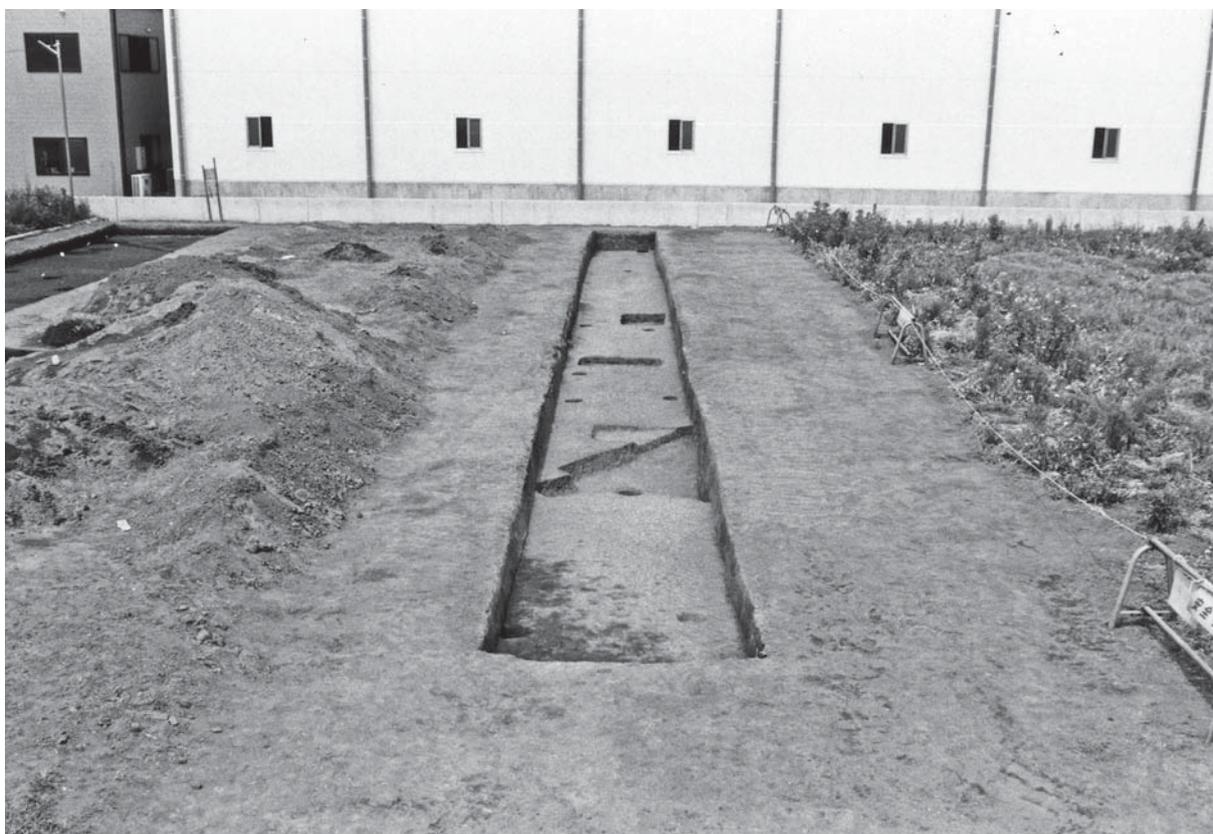
F 地点調査区遠景



F 地点調査区全景



F1・F3調査区全景

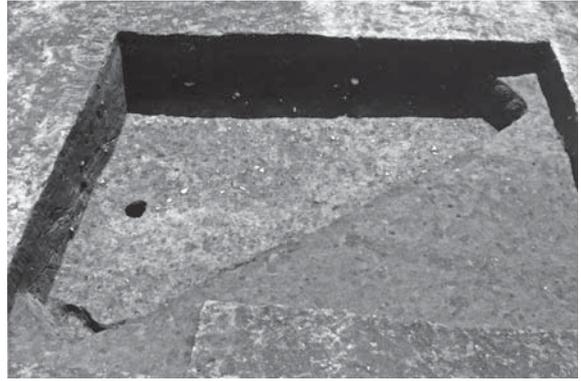


F2調査区全景

図版3



第76号住居跡



第77号住居跡



第77号住居跡遺物出土状態



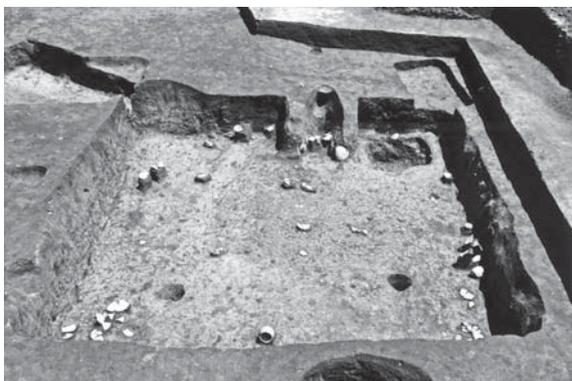
第78号住居跡



第79号住居跡



第79号住居跡カマド



第79号住居跡遺物出土状態 (1)

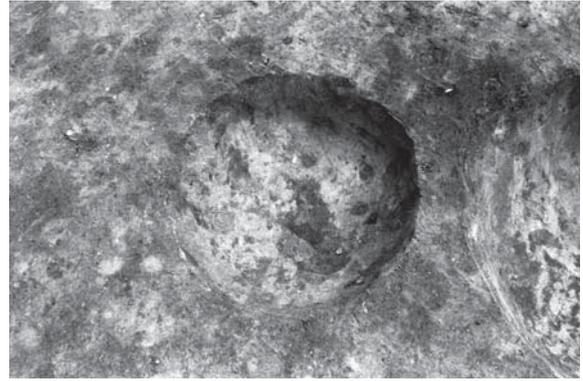


第79号住居跡遺物出土状態 (2)

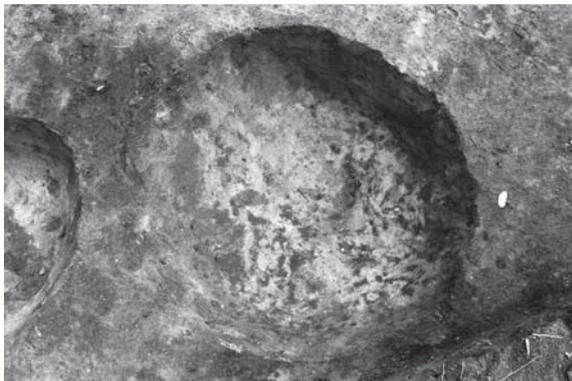
图版 4



第40号土坑



第41号土坑



第42号土坑



第43·51号土坑



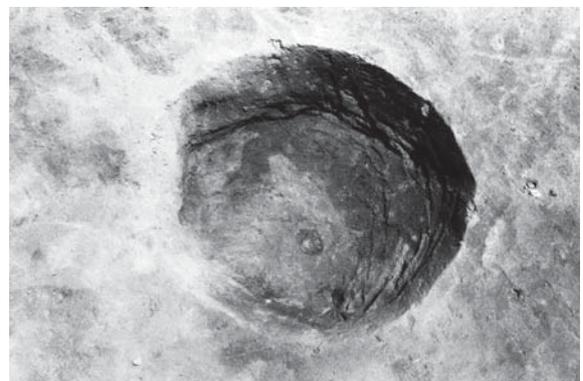
第44号土坑



第45号土坑



第46号土坑

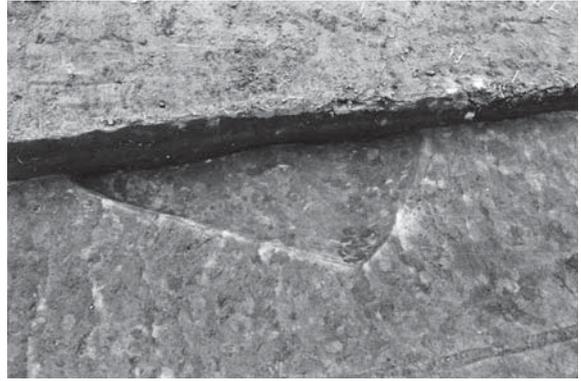


第47号土坑

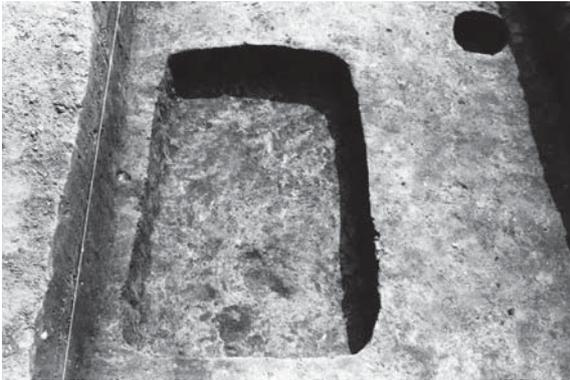
图版 5



第48号土壤



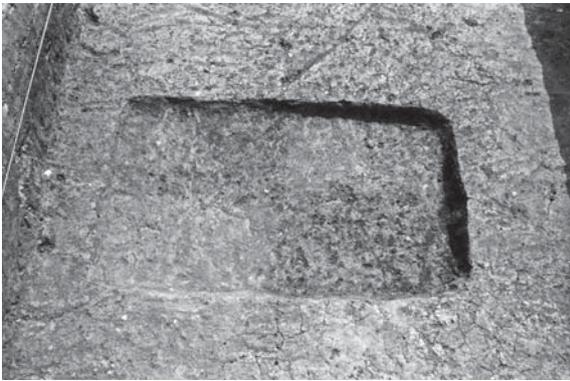
第50号土壤



第53号土壤



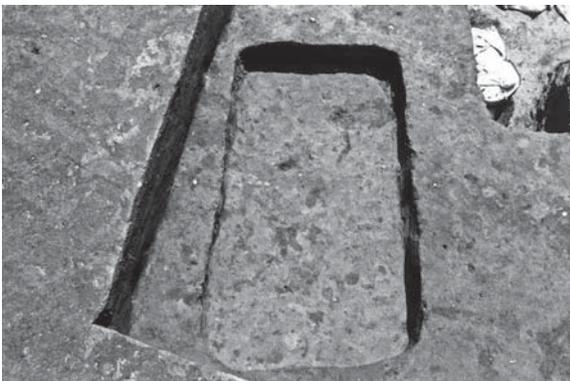
第54号土壤



第55号土壤



第56号土壤



第57号土壤



第9号沟迹

图版 6



77住-1



77住-2



77住-3



77住-8



77住-7



77住-6



77住-12



77住-13



77住-15



79住-2



79住-3



79住-4

住居跡出土土器 (1)

图版 7



79住-5



79住-6



79住-7



79住-9



79住-10



79住-11



79住-12



79住-13



79住-17



79住-14



79住-15



79住-20



79住-18



79住-19



79住-21

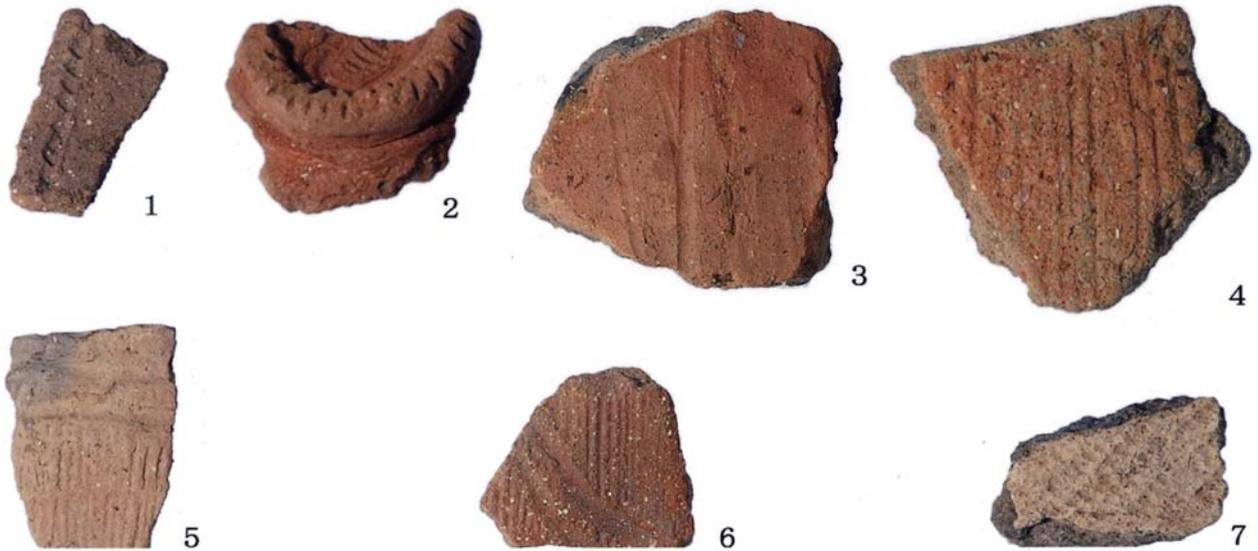


79住-22



79住-23

図版 8



調査区内出土の縄文土器

報告書抄録

フリガナ	ツカバタケイセキⅡ							
書名	塚島遺跡Ⅱ							
副書名	F地点の調査							
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書					巻次	第22集	
編著者	恋河内昭彦							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号					TEL 0495-25-1185		
発行日	西暦2008年(平成20年)6月10日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査 面積	調査 原因
つかばたけいせき 塚島遺跡 (F地点)	ほんじょうしこだまちょう 本庄市児玉町 きょうえい 共栄318-1	112119	53-028	36° 12' 48"	139° 11' 47"	20040416 ~ 20040528	200 m ²	倉庫 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
塚島遺跡 (F地点)		縄文時代 中期	土壌1		土器片			
	集落	古墳時代 後期	竪穴住居4		土師器			
		不明						

本庄市遺跡調査会報告書第22集

塚 畠 遺 跡 II

- F 地点の調査 -

平成20年6月2日 印刷

平成20年6月10日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号
(本庄市教育委員会文化財保護課内)

印刷／山進社印刷株式会社